京都産業大学　キャリア教育研究開発センター　F工房

平成24年度　活動報告書

Keep Innovating.
京都産業大学

巻頭言

Ｆ工房が開設されたのは平成 21 年 4 月 3 日、文部科学省平成 20 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援ＧＰ)」の採択事業として出発したときであった。その学生支援ＧＰの補助金によりＦ工房は３年間運営され、ファシリテーションの普及に多くの成果をもたらしたし、またそのことによって向こう３年を目途とする存続が決まった。そうやって大学の予算によって運営されるようになって１年目の今年、Ｆ工房の事業はまた新たな展開を迎えることとなった。

新たな展開の第一は、本学キャリア教育の中にファシリテーションがどっしりと根を下ろしたことである。とりわけ初年次生向けキャリア科目においては、受講生が飛躍的に増加したことに伴い、ファシリテーションを取り入れた参加型授業運営を経験する学生の数も大幅に増加し、初年次生の過半数に達した。これに伴い、Ｆ工房は授業運営のノウハウの創出と共有、学生ファシリテータの研修などに参画し、キャリア教育の分野におけるファシリテーションの定着に大きく貢献した。また、このような動きと連動して、関連する学会などでの発信が大幅に増加したことも付記しておきたい。

第二の展開は、キャリア科目におけるファシリテーションの実践が、各学部初年次ゼミなど学部専門科目の運営とより幅広いかたちで連動するようになったことである。この動きは、初年次生向けキャリア科目を運営した教員（その多くは新任教員である）によってもたらされ、学部専門科目における授業運営のデザイン、グループワークの運営などにおいてファシリテーションが活用されていることが報告されている。これを契機に、ファシリテーションが専門教育の領域でより成熟していくことが期待される。

第三は、ボランティア活動室、教育支援研究開発センター、教学センター、附属高等学校など他部署との協働がより緊密なものとなったことである。とりわけボランティア活動室との協働プログラムにおいては、地域の受け入れ側を含めすべてのステイクホルダーと連携しつつプログラムを企画・運営・振り返るプロセスに参画することができた。このことは、正課外の活動における学生支援領域でファシリテーションが大きな役割を果たしうることを示唆している。

第四に、昨年度に続きラボラトリー方式体験学習の知見をさらに深めることができた。大学という場でファシリテーションを普及していくためには、スキルの習得だけでなく、文化的・歴史的背景を含めた総合的な理解が欠かせない。そうした意味で、昨年に引き続き、この分野の先達である南山大学の津村俊充教授をお迎えし、学習を深めることができたことはまことに意義深い。

ここに述べた事業以外にも、私達は数多くの現場で、さまざまなクライアントと接しながら、粘り強くファシリテーションの普及に努めてきたし、またその都度、主たるクライアントである学生からさまざまなフィードバックを頂戴してきた。そうしたやりとりの一端を次ページ以降の行間から汲み取っていただければ幸いである。

Ｆ工房事業統括/文化学部教授　鬼塚哲郎

CONTENTS

巻頭言 …… 1

第1部　平成24年度活動報告

1. 年間活動実績概要（月別） …… 4
2. 事業報告 …… 8
   1）F工房主催事業 …… 8
   2）学内他部門との協力事業 …… 21
   3）授業の支援 …… 30
   4）課外活動の支援 …… 46
   5）高大連携 …… 49
   6）地域連携 …… 55
   7）学外への協力 …… 57
   8）学会・研究会への参加 …… 58

第2部　活動から得られた知見

1. キャリア教育を通じたファシリテータマインドの伝播 …… 62
2. さまざまなステイクホルダーとの協働 …… 66

活動を振り返って …… 70

参考資料

1. ファシリテーションの実践事例 …… 73
2. ファシリテーションとは …… 74
3. 「ふりかえり」を行う意義 …… 75
4. グループワークのすすめ方ガイド …… 76
5. グループワークによる多様な表現 …… 77
6. 学会等発表資料 …… 78

第1部　平成24年度活動報告

1. 年間活動実績概要(月別)

4月

5日(木)	授業の支援	文化学部スターティング・セミナー2012
9日(月)	授業の支援	イタリア語エキスパートⅠ
10日(火)	地域連携	京都府警察本部警務部教養課育成推進室 「職場に活かすファシリテーション(入門)」
11日(水)	授業の支援	キャリア・Re-デザイン　職員ファシリテータ研修
		自己発見と大学生活全体キックオフ会
19日(木)	授業の支援	大学生活と進路選択
20日(金)	授業の支援	久保ゼミ(法学部)授業支援
23日(月)	授業の支援	文化学部スターティング・セミナー2012 ふりかえり会
24日(火)	授業の支援	自己発見とキャリアプラン
25日(水)	主催事業	研修会「まだ間に合う！簡単にできるアイスブレイク」
	授業の支援	キャリファシの集い
《複数日にわたり実施》		
毎週(月)、(火)、(木)、(金)		
	授業の支援	自己発見と大学生活
18日(水)、28日(土)～29日(祝)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ

5月

2日(水)	授業の支援	人事・労務の実務
9日(水)	授業の支援	フィールド・リサーチ
11日(金)	授業の支援	プレップセミナー
16日(水)	授業の支援	キャリファシの集い
19日(土)	学会・研究会への参加	関西地区FD連絡協議会第5回総会 FD活動報告会2012でのポスター発表
23日(水)	課外活動の支援	アメリカンフットボール部ミーティング
27日(日)	学会・研究会への参加	大学教育学会第34回大会での自由研究発表
30日(水)	学内他部門との協力	司法外国語プログラム特別講演会 「災害と外国人～ウチらにもできること～」
《複数日にわたり実施》		
毎週(月)、(火)、(木)、(金)		
	授業の支援	自己発見と大学生活
9日(水)、23日(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ

6月

5日(火)～ 6日(水)	学内他部門との協力	夏休みふるさとボランティア 2012 in 福井 現地視察・事前打合せ
14日(木)	課外活動の支援	アメリカンフットボール部ミーティング
16日(土)	学会・研究会への参加	全国私立大学FD連携フォーラム 2012年度総会・パネルディスカッションでの発表
20日(水)	課外活動の支援	アメリカンフットボール部ミーティング
21日(木)	主催事業	ファシリテーションに関する学びの場
28日(木)	授業の支援	大学生活と進路選択
《複数日にわたり実施》		
毎週(月)、(火)、(木)、(金)		
	授業の支援	自己発見と大学生活
5日(火)、11日(月)		
	授業の支援	自己発見とキャリアプラン
6日(水)、13日(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ

7月

5日(木)	授業の支援	大学生活と進路選択
11日(水)	授業の支援	キャリファシの集い
	課外活動の支援	アメリカンフットボール部ミーティング
24日(火)	授業の支援	プレップセミナー
《複数日にわたり実施》		
毎週(月)、(火)、(木)、(金)		
	授業の支援	自己発見と大学生活
3日(火)、5日(木)、10日(火)、17日(火)、24日(火)		
	主催事業	ファシリテーションに関する学びの場

8月

6日(月)	学内他部門との協力	夏休みふるさとボランティア 2012 in 福井 参加者交流会
7日(火)～9日(木)		
	授業の支援	「自己発見と大学生活」キャリファシ　ふりかえり合宿
《複数日にわたり実施》		
9日(木)、23日(木)		
	主催事業	ファシリテーションに関する学びの場

９月

10 日(月)	学内他部門との協力	夏休みふるさとボランティア 2012 in 福井 出発直前オリエンテーション
11 日(火)	主催事業	ファシリテーション研究会・第 14 回ファシリテータ研修会
13 日(木)	学内他部門との協力	第 6 回法政研究会　報告
16 日(日)	学内他部門との協力	夏休みふるさとボランティア 2012 in 福井 ワークショップ運営
18 日(火)	学内他部門との協力	夏休みふるさとボランティア 2012 in 福井 ふりかえり
27 日(木)	授業の支援	アメリカ文化演習Ⅱ

１０月

3 日(水)	授業の支援	フィールド・リサーチ
10 日(水)	授業の支援	キャリア・Re-デザイン　職員ファシリテータ研修
《複数日にわたり実施》		
17 日(水)、31 日(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ
2 日(火)、15 日(月)、22 日(月)、23 日(火)		
	主催事業	ファシリテーションに関する学びの場

１１月

《複数日にわたり実施》		
6 日(火)、13 日(火)、20 日(火)		
	主催事業	ファシリテーションに関する学びの場
10 日(土)～11(日)、14 日(水)、28 日(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ

１２月

4 日(火)	課外活動の支援	燦メンバーへの研修
5 日(水)	課外活動の支援	燦メンバーへの研修
12 日(水)	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ
26 日(水)	課外活動の支援	京産共創プロジェクトⅡふりかえり会
《複数日にわたり実施》		
4 日(火)、11 日(火)		
	主催事業	ファシリテーションに関する学びの場

1月

9 日(水)	地域連携	京都府警察本部警務部教養課育成推進室 「職場に活かすファシリテーション(応用)」
25 日(金)	高大連携	京都産業大学附属高等学校 「キャリア・デザイン」プレゼンテーション大会審査
28 日(月)	高大連携	高大連携プログラム　グループワーク授業(第 1 回) 「京産大附属高校がもし 100 人の村だったら」
31 日(木)	学外への協力	一橋大学　ティーチング・フェロー　トレーニング・コースでの講演
《複数日にわたり実施》		
15 日(火)、22 日(火)、29 日(火)		
	主催事業	ファシリテーションに関する学びの場

2月

21 日(木)	授業の支援	2013 年度「自己発見と大学生活」キャリファシ　1st. ミーティング
24 日(日)	学会・研究会への参加	2012 年度　第 18 回 FD フォーラム　第 10 分科会での報告
27 日(水)	主催事業	ファシリテーション研究会・第 15 回ファシリテータ研修会
《複数日にわたり実施》		
5 日(火)、12 日(火)		
	主催事業	ファシリテーションに関する学びの場
4 日(月)、18 日(月)、25 日(月)		
	高大連携	高大連携プログラム　グループワーク授業(第 2～4 回) 「京産大附属高校がもし 100 人の村だったら」

3月

13 日(水)	高大連携	兵庫県立東灘高等学校 「人間関係を考える体験学習」講師
13 日(水)～ 14 日(木)	授業の支援	2013 年度「自己発見と大学生活」キャリファシ研修合宿

2. 事業報告

１）Ｆ工房主催事業

ファシリテーション研究会（春学期）・第14回ファシリテータ研修会

□テーマ・趣旨

［研究会］「自己発見と大学生活」でのファシリテーション実践

科目担当者（教員、学生）で同科目を振り返り、キャリア形成支援科目とファシリテーションの関係性および、それらが各担当者にもたらしたものを明らかにする。

［研修会］観察を科学するー「場の支援」のための技法ー

ファシリテーションの重要なプロセスである「観察」を科学的に考え、根拠に基づいた実践のための技術獲得の機会とする。

□概要

日　時　　9 月 11 日（水）10:00-16:30

場　所　　4 号館 4F 演習室

参加者　　学生 15 名（本学 10 名、他大学 5 名）、教員 4 名、職員 6 名、その他 4 名

□内容

［研究会］　運営：F 工房スタッフ

実践報告　「自己発見と大学生活」とは

本学におけるキャリア形成支援教育科目と「自己発見と大学生活」の趣旨・カリキュラム概要を説明。

パネルディスカッション　それぞれが思う「自己発見と大学生活」

同科目を担当した教員とキャリファシ（キャリア科目担当学生ファシリテータ）が登壇し、フリップにキーワードを記述してフロアに示す方式を用いながら実施。

（パネリスト）

教員：荻野晃大（コンピュータ理工学部）、久保秀雄（法学部）、長谷川晶子（外国語学部）

キャリファシ：筌場正起（外国語学部 4 年次）、竹村知紘（経済学部 3 年次）

（テーマ）

1. 「字」己紹介をお願いします
2. この科目を担当してみての感想をお願いします
3. 教員とキャリファシとの役割分担はどのようなものでしたか？
4. 授業の中で受講生同士の間には何がみえていましたか？
5. 授業の中であなたと受講生との間には何がみえていましたか？

［研修会］　講師：川中大輔氏（シチズンシップ共育企画）

導入・グランドルール説明・アイスブレイク

はじめに講師より全体進行とグランドルールの説明があった。その後、アイスブレイクとして「人間マッピング」を実施。「ファシリテータの経験」と「グループワークの『好き・きらい』」を縦横軸として4つのエリアをつくり、各参加者が自己申告でいずれかのエリアに立ち、参加者の全体像を把握。

セッション1　観察をためしてみる

「人間マッピング」での順を活かして、経験・知識がそれぞれに異なる3人が1組となり、「最近悩んでいること」をテーマに1対1の対話を行う。対話に参加しない1人は、その様子を観察する。終了後、全員で「何を見ていたか」をフリップに書いてシェアした。

セッション2　ファシリテータが観察するとは？

ファシリテーションの働きと「観察」についての小講義。ファシリテータがすべき「観察」とは、「メンバーが何をやっているか（コンテント）」よりも「何がそうさせているのか（プロセス）」に着目することが重要であること、また、そのためのヒントとして「グループプロセスの10の視点」の提示があった。

セッション3　観察眼を鍛える！

グループを再度組み直し、7〜8人でのワークを実施。メンバーのうちファシリテータ1名、プレーヤー3〜4名で1枚の写真にタイトルをつける「ネーミング」のワークを15分間にわたり実施、残る3名は観察者としてワークが行われるプロセスを観察する。終了後、グループ内でそれぞれが思ったこと、気づいたことを付箋紙に書き出し共有。

□成果・課題

［研究会］

パネルディスカッションでは、教授すべきコンテンツが明確には存在しないキャリア科目の特異性に対する戸惑いが教員の感想として聞かれた。それと関連して、授業運営に際しては既存のマニュアルだけでは不十分であり、それを補うために教員・キャリファシ間での綿密な打合せと情報共有が不可欠であることが指摘された。また、授業の成果や受講生の成長、クラスの雰囲気をみるための一つの手がかりとなっていた「シェアリング・ブック」は情報共有ツールとして有効であることが確認された。

［研修会］

ファシリテーションのもっとも重要なスキルのひとつである「観察」について、根拠づけを行うことでより説得力をもって実践する場とできた。参加者からは特に「自分への気づきと課題」に関するコメントが多く、単に技術獲得だけでなく、ファシリテータ・マインドの周知と普及についての効果があったと考える。一方、もともと意識の高い人が参加しているため、グループワーク等はうまくいって当然であるとの意見もあり、実際に意識や意欲のさまざまな人が集まる場をどうファシリテートするか等、参加者の日常の活動につなげられるテーマが必要であると感じられた。

□参加者アンケート結果（回答者：21 名）

《属性》　　学生 15 名、教員 2 名、職員 1 名、その他 3 名

・イベントを知った媒体

ポスター	0 名
POST（電子掲示板）	1 名
関係者よりの口コミ	11 名
ダイレクトメール	5 名
その他	4 名

・F 工房主催プログラムへの参加経験

なし	11 名
あり	10 名

・ファシリテーションの実践経験

よく実践している	3 名
ときどき実践している	13 名
知識はあるが経験はない	2 名
ない	3 名

□参加者からの声（ふりかえりシートより一部抜粋）

［研究会］

・報告／パネルディスカッションを聞いて参考になったこと

コンテンツの定まっていない授業がいかに難しいか。（学生）

他のクラスの話を聞いてふり返りができた。やはり同じことを考えたんだなぁと。（学生）

自分と同じような発想に出会えたこと。（教員）

・新しく得た視点やアイディア

考え方に柔軟性をもって持って取り組むこと。違う立場の方の意見も同じ立場となり少し考えてみる。（学生）

時代背景（学生）

［研修会］

・研修を通じて得たこと、気づいたこと

観察する”仕方”を学んだという感じでした。まわりを案外見れてないのかな、と。人や物を見ることって案外難しい…頭？体力使うのではないかと知った。（学生）

理論を知るか知らないかの大切さ。（学生）

自分の見方は「成果志向が強い」ということ。プロセスの中で、他人のアイディアを求めることを重視し、個々人の気持ちは軽視。（教員）

意外と相手を見れていない、自分の観察のクセ。（学生）

みんなで共感していると思っていたことが、納得していない人もいてそうやったのか…と後で知って驚いた。（学生）

最後のワークショップのふりかえり方法が大変有益だった。どの時点で共有すべきか、立場の違いをどう可視化していくか、など。（教員）

他の参加者の年齢などによって自分のスタンスが大きく変わる。（教員）

・気づきや学びを今後どのように活かすか

感じたことにとどまらず、その根拠となっているコンテントに着目し、具体的な切り口をもった観察をしていかないといけないんだと肝に銘じた。（職員）

推察にすぎないものを質問等によって確認していかないと推察だけが一人歩きする。このことはとても新鮮であると同時にすごく心に残り、今後の指針の一つとなった。（職員）

サークルなどでもグループで話し合うことがあるので、他の人のことを少しでも意識して進めていきたい。また、介入などで話を修正することができるような力もつけていきたいです。（学生）

自分が聞いているときの態度、大人からの意見を新しい視点として得た。（学生）

考えます（まだ答えが出ていないです）。（教員）

ファシリテーション研究会（秋学期）・第15回ファシリテータ研修会

□テーマ・趣旨

［研究会］「グループワークと授業－グループワークだからできることを共に考える」

グループワークを効果的にすすめるための「プロセス」を理解するための講義。昨年度の研究会での内容を、より理論的背景を強化するとともに、実際に体験学習を行うことで当事者として学ぶ。

［研修会］「グループワーク運営の実践」

午前中の研究会での理論を意識しながら、グループワークプロセスを体験することで、学びの定着をはかる。

□概要

日　時　　2 月 27 日（水）10:00-16:30

場　所　　12 号館 12201 教室

参加者　　学生 7 名（本学 4 名、他大学 3 名）、教員 6 名、職員 3 名、その他 5 名

□内容

［研究会］　講師：津村俊充氏（南山大学）

ラボラトリー方式の体験学習

特別に設計された人と人が関わる場において、“今ここ”での参加者の体験を素材（データ）として、人間や人間関係を参加者とファシリテーターとが共に学ぶ（探求する）方法」である。

人間関係を捉える 2 つの視点「コンテントとプロセス」

対話等の場面において、当事者どうしが何を話しているか (what) がコンテントであり、どのように（how）話しているかがプロセスである。体験学習においては、特にプロセスに着目することが大切である。

グループワーク実習「なぞのマラソンランナー」、ふりかえりと共有

ひとつの絵を切り離し、グループメンバーは渡されたピースの情報を口頭のみでやりとりすることにより、「4 番目に走っているランナー」が誰かを推理するワーク（制限時間 20 分）。終了後、グループ内でプロセスに関するふりかえりを実施。

※その他、参考事例として講師による授業での実践例が紹介された。

［研修会］　運営：F 工房スタッフ

自己紹介、アイスブレイク

全員で「名前」と「私のこだわり」をフリップに書いて自己紹介し、「持っているマーカーの色が全員ちがうメンバー」を条件に 3 つのグループに分かれた。各グループでアイスブレイクとして「名脇役」を挙げていくというゲームを実施。最初はブレーンストーミン

グ形式でできるだけたくさんの「名脇役」を出し、次のステップとして、その中から 1 つの「Best of 名脇役」をメンバー合意のもとに選出し発表した。

合意形成グループワーク「シェアハウスのお手伝いさん」

メンバー全員の合意のもと、6 人のことなる特性をもった候補者の中から 1 人に内定を出すワーク（制限時間 35 分）。研究会では 1 つの正解があるタイプであったため、午後はメンバーで最適な解を選択するという形式にした。終了後、誰を選んだか、理由をつけて発表した。

ふりかえり、シェアリング

グループワークのプロセスに焦点をあててふりかえるとともに、「正解のあるワーク」と「正解のないワーク」のちがいについての議論を行った。最後は、自己紹介の時同様、全員がフリップに「今日の感想」を書き、共有して終了。

□成果・課題

研究会ではグループワークの理論的背景に基づき、ファシリテータとして見るべきものについての理解を深めることで、これまで現場感覚に頼りがちであったファシリテーションの根拠を強化することができた。

午前・午後で共通するテーマで、座学と参加型学習を組み合わせて行うことで、津村氏が提唱する「体験学習の循環過程」を参加者自らが文字通り「体験」できる機会となった。また、正解ある／なしの異なったタイプのゲームをすることで、グループワークの際の目標（課題達成、メンバーの合意形成）に応じたメンバーの心の動きや行動について考える機会となった。

参加人数はあまり多くなかったものの、教職員および社会人の割合が通常よりも多く、偏りの少ないメンバーでワークを進めることができた。

□参加者アンケート結果（回答者：6 名）

《属性》　学生 2 名、教員 0 名、職員 3 名、その他 1 名

・イベントを知った媒体

ポスター	1 名
POST（電子掲示板）	1 名
関係者よりの口コミ	3 名
ダイレクトメール	1 名
その他	0 名

・F 工房主催プログラムへの参加経験

なし	2 名
あり	4 名

・ファシリテーションの実践経験

よく実践している	1 名
ときどき実践している	4 名
知識はあるが経験はない	0 名
ない	1 名

□参加者からの声（ふりかえりシートより一部抜粋）

［研究会］

・講演を聞いて参考になったこと

「ラボラトリー方式」という言葉を聞いたことがなかったので新たに知ることができた。（学生）

これまで自分が思っていたことを理論として聞くことができて面白かった。自信が少し出ました。（職員）

ふりかえってこそ自分のものになる、ということを改めて認識し、日常から習慣づけたいと思った。（職員）

・新しく得た視点やアイディア

人と「聞き手、話し手」で話しているときにおこるプロセスから、最終思考が行動を決定するので、思考に寄り添うことで行動に介入することになる。（職員）

このような学びを、小中高校のうちから共育し、実践させるべき。そうすれば、今、問題になっている「いじめ」も減らせるのではないか。（職員）

How があるから What がある（その他）

［研修会］

・研修を通じて得たこと、気づいたこと

継続は力なり。（学生）

一つの文章を一人はデメリットと捉え、一人はメリットと捉える面白さ。（学生）

本音で話し、本音を引き出すことが大切。（職員）

・気づきや学びを今後どのように活かすか

今後、参加するイベントだけでなく、日常にも生かしたい。（学生）

職場でコンセンサスを得るとき、しっかりと理由づけができたうえで提案し、納得してもらえるようにする。（職員）

話し合いつつ、自分を俯瞰する自分を持ちたい。（職員）

・その他感想

就職活動のときのグループワークや研修ではチームリーダーとして議論をまとめることはあったが、それがファシリテーションにきちんとなっているのかわからない。楽しく勉強させてもらいました！ありがとうございました。（職員）

先生の気配を消すのがいいのか、どうか…（職員）

研修会「まだ間に合う！簡単にできるアイスブレイク」

□テーマ・趣旨

授業やグループ活動等でのメンバー間の雰囲気をなごませ、話しやすくする「アイスブレイク」の意義を知り、実習を通じて自分で運営できるスキルを身につけるワークショップ。平成 23 年度末に刊行した「キャンパスで使える！アイスブレイク集」の利用促進の機会とする。

□概要

日　時　　4 月 25 日（水）13:30-15:30
場　所　　5 号館 5322 演習室
参加者　　学生 5 名（本学のみ）、職員 2 名、その他 2 名

□内容

F 工房事業紹介

グループ活動の支援など、F 工房を利用してできることを案内。

アイスブレイク体験談（1）

参加者どうしで、これまでにアイスブレイクの経験のある人を中心に、アイスブレイクを実施した事例（場面、対象など）を共有。

ワークショップ「アイスブレイク実践」

グループごとに、「キャンパスで使える！アイスブレイク集」の冊子の中から、手順に従って実際にアイスブレイクを運営。各グループで選択したものを全員で実施。その後ふりかえりを通じて、感想や運営の注意点をお互いに指摘しあい、実践の場でのシミュレーションとした。

アイスブレイク体験談（2）

ファシリテータ経験者から、うまくいかなかった事例を報告してもらい、原因の分析や対処法などを議論した。

ふりかえりとシェア

実際にアイスブレイクを運営してみての感想や､進行上のヒントなどの意見交換を行った。

□成果・課題

新学期が始まってすぐの時期ということで、具体的にアイスブレイクを実施する予定のある人が参加者の中心で、現場ですぐに使えるスキルを学ぶ場とすることができた。アイスブレイク実践のワークショップでは、学生が「楽しく話せる」と思って選んだテーマが職員にはなじまなかったり、面白さを追求するあまり不当にプライバシーに踏み込んだり

してしまい、「場の雰囲気を和らげる」というアイスブレイクの目的と逆の効果をもたらしてしまう等、実際の活動場面で注意を払わなければならないことが具体的に明確になった。

研修の場なので、当然に皆協力的な態度でワークショップに臨んだが、実際にはもっと堅苦しい雰囲気の中でアイスブレイクを行う必要があることも多いと考えられる。状況設定など、ロールプレイの性格をもたせたワークショップにすることも一案かもしれない。

□参加者アンケート結果（回答者：8名）

《属性》　学生4名、教員0名、職員2名、その他2名

・イベントを知った媒体

ポスター	3名
POST（電子掲示板）	1名
関係者よりの口コミ	3名
ダイレクトメール	0名
その他	1名

・これまでの知識

よく知っていた	1名
だいたい知っていた	5名
よく知らなかった	2名
まったく知らなかった	0名

・アイスブレイクの参加経験

参加・運営ともに経験あり	8名
参加のみ経験あり	0名
運営のみ経験あり	0名
いずれもなし	0名

・今後の参考になったか

そう思う	7名
やや思う	0名
どちらともいえない	1名
あまり思わない	0名

□参加者からの声（ふりかえりシートより一部抜粋）

・新たに得た視点や学び

いつも「アイスブレイク」をすることが目的になりがちだけど、アイスブレイクを通じて参加者にどうなってほしいか考えることが大切だと思った。
アイスブレイクの事前準備の大切さ、ファシリテータをするうえで大切なことがわかってよかった。
アイスブレイクはとにかくやればよいというものではなく、どういう目的でどのツールを使って行うかをしっかり考えることが必要だと思った。

・アイスブレイク運営上の疑問、もっと知りたいこと

どうすれば説明が伝わりやすくなるか。
積極的に参加しない、できない学生や生徒を関わらせていく方法。最初の口火を切らせるには？

・自身の活動のヒントになること

事前準備の大切さ。事前準備がアイスブレイクの良し悪しを左右する。
大人数でのアイスブレイクの方法。
アイスブレイクしてもらう側にもファシリテータは必要かもしれない。
目的別にアイスブレイクを使い分けること。

・課題に感じたこと

人を盛り上げるために、自分も盛り上がらないといけないが、それがうまくできていないこと。
アイスブレイクを伝える能力、説明する能力。
事前準備の必要性とファシリテータの難しさ。

ファシリテーションに関する学びの場

□テーマ・趣旨

ファシリテーションを学べる場を定期的・継続的に提供することで、学内でのファシリテーションに対する心理的距離を近くし、具体的スキルを得られる場を保障する。

□概要

日　時、参加者　　別表のとおり（時間はいずれも 16:45-18:15）
場　所　　F 工房

	回	テーマ	参加者	教員	職員	学生
6 月	1	ファシリテーション・グラフィック「コピー用紙活用編」	6	0	1	5
	2	ファシリテーションが向く場・向かない場とは？	3	0	2	1
7 月	1	ファシリテーション入門	9	0	5	4
	2	ファシリテーション・グラフィック「付箋紙編」	2	0	2	0
	3	「ふりかえり」について考える	5	0	3	2
	4	プログラムをつくろう	0	0	0	0
8 月	1	ファシリテーション・グラフィック「会議を記録する編」	2	0	2	0
	2	フラットな関係性について考える	4	1	3	0
	3	プログラムデザインについて考える	0	0	0	0
9 月	1	アイスブレイク	0	0	0	0
10 月	1	ファシリテーションを活用する現場	2	0	0	2
	2	情報のとり方（みる、きく）	2	0	0	2
	3	情報のまとめ方（伝える）	4	0	0	4
	4	プログラムをつくる	0	0	0	0
11 月	1	ファシリテーションの歩み	1	1	0	0
	2	ファシリテーション・グラフィック「ホワイトボード編」	1	0	0	1
	3	自分の行動傾向について知る	1	0	0	1
	4	プログラムをつくる	0	0	0	0
12 月	1	ファシリテーションに関する諸理論	1	0	0	1
	2	ファシリテーション・グラフィック「紙のノートでここまでできる」	2	0	1	1
	3	ファシリテータって何をする人？	0	0	0	0
1 月	1	ファシリテーションに関する諸理論	3	0	2	1
	2	人に伝えるには～思ったことを文字化する～	2	0	2	0
	3	会議・ミーティング運営のコツ	3	0	0	3
2 月	1	会議・ミーティング運営のコツ（その 2）	1	0	1	0
	2	ホワイトボード活用術	2	0	0	2
	3	納得を導くプロセスを見てみよう	0	0	0	0
計			56	2	24	30

□内容

［6 月］

基礎編（1）ファシリテーション・グラフィック「コピー用紙活用編」

特別な準備をしなくても始められる、コピー用紙とマーカーを使ったファシリテーション・グラフィックの実習。はじめに、基本的技術である太字マーカーの使い方を最初に練習、テーマにそって単語や短文を書いてみて、太さや色のもつ印象を参加者どうしで指摘し合い、自分の言いたいメッセージはグラフィックによりより伝わりやすくできることを体験した。

基礎編（2）ファシリテーションが向く場・向かない場とは？

KJ 法を用いて、ファシリテーションが向く場、向かない場を洗い出し、それぞれについてなぜファシリテーションが向くのか（向かないのか）を議論し、現場での活用のヒントとした。ファシリテーションの向き不向きを左右する要因として、人数や環境（場のデザイン）、授業テーマ等があげられた。また、人数が多い場合、小グループの構成で工夫が可能なことが指摘された。

［7 月］

入門編　ファシリテーション入門

対人関係における関係性を、「介入の度合い」「当事者間の力の差」を軸にマッピングした図を用いて、それぞれの関係性はどのような現場で見られるか意見を出し合った。ファシリテーションは、「共感」「支援」という関係性になじみ、逆に「指示」「命令」「管理」には遠いことを、先に出された現場から解説した。

基礎編（1）ファシリテーション・グラフィック「付箋紙編」

付箋紙の使い方に特化した回。サイズ、色、素材、粘着力等、市販されているあらゆるタイプの付箋紙を紹介し、実際に使いながら、目的別に適切なものを選択した。

また、参加者有志の運営、付箋紙を使ったミニ・ディスカッション実習を行った。その際、応用できる技として、模造紙が広げられる十分なスペースがない場合にも使える、A4 サイズの紙を台紙にしたカテゴリー分類の手法を用いた。

基礎編（2）「ふりかえり」について考える

ワークショップ等の結果を共有し、定着させるために実施する「ふりかえり」の効用についてディスカッションし、具体的効果を文字化するワークを実施。「主催者のメリット」「他者の理解から得る客観的視点」「自己理解（の確認と深化）」「気持ちの整理」等のキーワードで集約された。また、参加者どうしでの現場での課題共有を行った。

応用編　プログラムをつくる

（参加者なしのため実施せず）

［8 月］

基礎編（1）ファシリテーション・グラフィック「会議を記録する編」

書き取りに徹底した実習。ニュース原稿を読み上げ、それを聞きとって作成したメモを基に、再構成して A4 サイズ用紙 1 枚にまとめ、参加者どうしで共有して相互評価を行った。図表や多色構成による整理や順位づけ等を行うことで、多大な量の情報も視覚的にわかりやすくすることができることが確認できた。

基礎編（2）フラットな関係性について考える

ファシリテーションが機能するために不可欠な環境である「フラットな関係性」の定義を共有した上で、フラットな関係性のメリット、デメリットについて意見交換を行った。「安心感や連帯性をもたらすことができ、結果として意欲の向上につながる」「『順位争い』に無駄な時間を費やさずに済む」「思ったことをそのまま伝えられるため、多様性が期待できる」等のメリットの一方、「全員が『無責任』になったときに収拾がつかない（特に大人数のとき）」「決定が遅い」というデメリットも指摘された。

また、フラットな関係づくりを推進する要因と抑制する要因についての整理を行い、推進する

応用編　プログラムデザインについて考える

（参加者なしのため実施せず）

［9 月］

特別編　アイスブレイク

（参加者なしのため実施せず）

［10 月］

入門編　ファシリテーションを活用する現場

小講義形式で実施。「リーダー」「マネージャー」「ファシリテータ」を「メンバーとの関係性」「メンバーどうしの関係性」から比較、それぞれの概念のちがいを明らかにした後、支援のプロセスについて解説した。

基礎編（1）情報のとり方（みる、きく）

観察者となったときに留意するポイントを解説し、実際に小グループでのセッションを観察。その際「主観情報（発言された内容をそのままの形で記録）」「客観情報（表情や間合いなど）」「推察（観察者が感じたこと）」を意識して識別するようにした。

同じセッションを複数で観察したことで、「見方」「感じ方」のちがいが明らかになり、個々の行動認知とすることができた。

基礎編（2）情報のまとめ方（伝える）

1 枚のイラストに描かれた情報を口頭のみで伝え、情報の受け手が再構成する実習。俯

瞰から細部へという順で説明すると受け手にイメージが伝えやすいこと、「大きい」「きれいな」などの表現は価値判断を含んでいるため、思っているものとちがうものが描かれてしまいがちなこと等を学んだ。

応用編　プログラムをつくる
（参加者なしのため実施せず）

［11 月］
入門編　ファシリテーションの歩み
　ファシリテーションの歴史的背景と諸理論についての小講義と、参加者のニーズに基づいた個別対応。

基礎編（1）ファシリテーション・グラフィック「ホワイトボード編」
　ファシリテーション・グラフィックの意義についての小講義の後、参加者希望により場のデザインづくりの相談に対応。

基礎編（2）自分の行動傾向について知る
　コミュニケーション分析モデルである「ジョハリの窓」を紹介し、自己開示（自分→他者）とフィードバック（他者→自分）が円滑なコミュニケーションとチームの成長につながることを提示。

応用編　プログラムをつくる
（参加者なしのため実施せず）

［12 月］
入門編　ファシリテーションに関する諸理論
　ファシリテーションの歴史的背景と諸理論についての小講義と、参加者のニーズに基づいた個別対応。

基礎編（1）ファシリテーション・グラフィック「紙のノートでここまでできる」
　会議等の場で、ホワイトボードの代わりに紙で記録をとる場合の、その場で共有しやすいような形式や筆記具の選び方を解説。また、コピーや写真をとってすぐに共有できること、何枚でも追加可能なことなど、むしろホワイトボードよりもすぐれた点も紹介した。

基礎編（2）ファシリテータって何をする人？
（参加者なしのため実施せず）

［1 月］
入門編　ファシリテーションに関する諸理論
　グループ・ダイナミクス、ゲシュタルト・アプローチ、体験学習によるプロセス・エデ

ュケーションの 3 つの概念についての小講義の後、対話セッションの観察を通してプロセスを見る実習を行った。

基礎編（1）人に伝えるには～思ったことを文字化する～

10 月にも実施した、イラストに描かれている情報を口頭で伝えて再構成する実習。情報を文字化するときの注意点の解説も合わせて実施した。

基礎編（2）会議・ミーティング運営のコツ

付箋紙を使ったファシリテーション・グラフィックの実習の後、参加者が交代でミーティングを運営する実習を行った。

［2 月］

基礎編（1）会議・ミーティング運営のコツ（その 2）

前回の続編として具体的に参加者が運営する予定のミーティングのシミュレーションを実施。

基礎編（2）ホワイトボード活用術

ホワイトボードを使った会議実習の予定だったが、参加者希望により「研究室に設置されているホワイトボードの効果的な使い方」について考える場とした。

応用編　納得を導くプロセスをみてみよう

（参加者なしのため実施せず）

□成果・課題

主催事業として実施したことで、授業や課外活動など、それぞれの属性にかかわらず、ファシリテーションについて理解を深める場を提供できた。各回の参加者は少数で、それぞれのニーズを共有することが可能となったが、全体の普及についてはまだ課題が多い。

参加者がもつニーズは、授業運営（教員）、課外活動支援（職員）、サークル等での人間関係づくり（学生）、他大学との交流行事（学生）等多岐にわたり、それぞれが「ファシリテーション」というキーワードによって、より充実した活動をめざしていることを共有できた。

企画したものの、結果的に参加者が集まらず実施に至らなかった回が何度かあった。それらは月末に集中しており、日程の問題があった可能性がある。中止にするのではなく、日程を変更して開催することを検討してもよかったのではないかと思う。

2）学内他部門との協力事業

■ボランティア活動室

夏休みふるさとボランティア2012 in福井

□テーマ・趣旨

福井県農林水産振興課が主催する地域おこしプログラムである「ふるさとワークステイ」を京都産業大学の学生向けにアレンジした事業。夏休み期間を利用して福井県下の 3 つの地域で農作業や地域の行事などの手伝いを通して地域の課題やボランティアの意義について考えることを目的とする。

F 工房は活動前の交流会・オリエンテーション、活動最終日のワークショップ、活動後のふりかえりの運営を主に担当した。活動にあたって、学生ファシリテータ 4 名を公募した。

［現地視察・事前打合せ］

現地コーディネータおよび担当者と事業目的を共有し、学習効果のあるプログラム策定について議論を行う。また、ワークショップ会場の下見を行い、プログラムづくりの参考とする。

［参加者交流会］

参加者が一堂に会し、顔合わせを行うことで、活動イメージの共有をはかる。また、活動に関する参加者の疑問点を明らかにし、不安なく活動ができるようにする。

［出発直前オリエンテーション］

同じ地域で活動するメンバーでのグループワークを通して、活動中の役割分担の明確化とチームビルディングをはかる。また、必要物品の確認やリスクマネジメントについての最終確認を行う（ボランティア活動室担当）。

［最終日ワークショップ運営］

3 日間の地域での活動で得た、地域の現状や課題などを、学生、現地受入れ担当者、行政担当者を交えて共有する。また、学生にとっては、3 日間の活動のデブリーフィングの場とする。

［ふりかえり］

プログラムの運営面も含めた、参加者とファシリテータによるふりかえりの場。

□概要

［現地視察・事前打合せ］

日　時　　6 月 5 日（火）18:30-19:30*、6 月 6 日（水）9:00-18:30

*5 日は交通機関の遅れのため、予定より 30 分遅れての実施。

場　所　　福井県内 3 地域

・勝山市役所　農林部農林政策課（福井県勝山市）

・自然体験共学センター（福井県福井市）

・鯖江市役所　特産づくり応援室（福井県鯖江市）

参加者　ボランティア活動室スタッフ 2 名、F 工房スタッフ 1 名、
ふくいエコ・グリーンツーリズム・ネットワーク職員 2 名（現地コーディネータ）、勝山市農林政策課担当者 1 名、自然体験共学センター職員 1 名、
鯖江市特産づくり応援室職員 2 名、農林政策課職員 1 名

［参加者交流会］

日　時　8 月 6 日（月）13:00-15:00

場　所　4 号館 4F 演習室

参加者　ボランティア参加学生 18 名、学生ファシリテータ 3 名、ボランティア活動室スタッフ 1 名、F 工房スタッフ 1 名

［出発直前オリエンテーション］

日　時　9 月 10 日（月）10:30-14:30

場　所　4 号館 4F 演習室

参加者　ボランティア参加学生 15 名、学生ファシリテータ 4 名、ボランティア活動室スタッフ 1 名、F 工房スタッフ 1 名

［最終日ワークショップ］

日　時　9 月 16 日（日）13:30-15:30

場　所　勝山市民会館（福井県勝山市）

参加者　ボランティア参加学生 20 名、学生ファシリテータ 4 名、現地コーディネータ 2 名、現地受入れ団体関係者 3 名、行政担当者 1 名、ボランティア活動室スタッフ 1 名、F 工房スタッフ 1 名

［ふりかえり］

日　時　9 月 18 日（火）14:00-16:00

場　所　4 号館 4F 演習室

参加者　ボランティア参加学生 1 名、学生ファシリテータ 4 名、ボランティア活動室スタッフ 1 名、F 工房スタッフ 1 名

□内容

［現地視察・事前打合せ］

勝山市（平泉寺地区）

市役所での担当者との協議の後、受入れ先となる農家を訪問し、活動内容の確認（菊の出荷作業、稲刈り）を行った。個人宅への宿泊のため、プライバシーに配慮しつつも、家族との交流も楽しんでほしいとのこと。

福井市（上味見地区）

受入れ担当である NPO 法人「自然体験共学センター」で活動内容の確認（秋祭りへの参加、赤かぶら畑のおよび宿泊地の視察を行った。若者不足が深刻な状態で、伝統行事等への参加を通じて地域を盛り上げるとともに、外部の人間だからこそできる意見表明を期待している。以前に本学学生が「ふるさとワークステイ」に個人参加したことをきっかけに、青年団と協働で赤かぶらの販売促進プロジェクトを進行中であり、地域の人はよい印

象をもっている。

鯖江市（河和田地区）

活動内容、宿泊地ともにまだ決定しておらず、行政担当者との協議が中心となった。市としては獣害対策に力を入れており、活動内容もそれに関連したものになる予定。

［参加者交流会］

趣旨・目標説明

ボランティア活動室スタッフより、事業趣旨や学生に学んでほしいこと、F 工房との協働の経緯などを説明。その後本日の趣旨説明と学生ファシリテータの紹介を行った。

アイスブレイク・グループ分け

1 人 1 枚ずつ配られたカードに書かれたキーワードを手掛かりに、同じカテゴリとなるグループメンバーをさがすゲーム。

スライドショー「ふるさとボランティア概要＆地域のようす」

6 月の現地視察で撮影した写真を中心に、活動地域のようすをスライドショーにして全員で視聴。

ワークショップ「福井があなたを呼んでいる」

「私のふるさと自慢」をテーマにグループごとで自己紹介を行ったあと、各自付箋紙を用いて「楽しみにしていること」「不安なこと」などボランティア活動を行う上での思いを共有した。

感想として、「どんな人が来るのかわかった」「メンバーと仲良くなれた」「ボランティアに行くのが楽しみになった」、活動に希望することとして「メンバーと楽しく過ごしたい」「自炊が心配だが、思い出をたくさん作れたらいい」等の意見があがった。

［直前オリエンテーション］

スケジュール確認、リスク管理

ボランティア活動室スタッフより、4 日間のスケジュール、緊急時（熱中症、虫刺され、その他急病）の対処方法についての説明。

アイスブレイク

はじめから活動地域別のメンバーでグループを組み、「私のふるさと自慢」で自己紹介。

グループ内での役割分担（パート 1）

自分たちのグループの活動では、どのような役割が必要になるのかブレーンストーミング形式で意見を出し合った。終了後、各グループから中間報告。終了後昼休みに入った。

途中までの参加者は、午後に備えて自分の希望する役割をメンバーに伝えてから帰る。

グループ内での役割分担（パート 2）

午前中に共有したアイディアをもとに、メンバーの希望や特技などを加味して役割を決定した。欠席者がいるグループは、決定した内容をどのように伝えるか考え、情報共有を徹底した。

自己紹介用紙の記入

活動でお世話になる現地の方に、どんな学生が行くのかを事前に知らせるために作成。A4 サイズのフォーマットに「参加の動機」「楽しみにしていること」「不安なこと」「活動に向けて一言」を記入した。

記入したものは、終了後とりまとめて現地の担当者に送付した。

［最終日ワークショップ］

ワールドカフェ

「Fukui（地域の現状）」「Membership（グループメンバーとの関係）」「Communication（現地の人とのふれあい）」「Volunteer（活動内容）」の 4 つのテーマをもったテーブルを準備し、15 分×4 セッションで実施。活動に参加した学生のほか、現地のコーディネータ、受入れ先担当者、行政担当者等が、活動地域の枠を超えて意見交換を行った。

その後の分析の参考のため、コメントは地域別に色分けした付箋紙を用いた。

受入れ先へのメッセージ作成

活動地域別に、色紙にメッセージを記入。現地コーディネータに受け渡しを依頼した。

□成果・課題

昨年度と比較して、準備段階から関与したことで、より洗練されたプログラムを考案、提供することができた。特に、ボランティア最終日に実施したワークショップでは、学生と受入れ側が同じテーブルでふりかえりをしたことで、学生のみならず地域へのフィードバックの効果もあったと思われる。今回活動をした地域はどこも若者・後継者不足に悩んでおり、ボランティアという形で一時的にせよ若者がかかわることで、住民をエンパワーし、地域が活性化されることを参加者の発言から感じた。

また、学生がファシリテータとしてワークショップを運営したことで、ボランティア学生が自分の思いを話すことに注力できるという環境を作った。

□参加者アンケート結果（回答者：18 名）　*Ｆ工房に関連のある部分を抜粋

・活動を知った媒体

POST（電子掲示板）	15 名
ポスター等掲示物	2 名
知人からのクチコミ	1 名
メール	0 名
その他、無回答	0 名

・ボランティア活動室の主催プログラムへの参加経験

初めて	13 名
経験あり	5 名（2 回目）

・活動時期（9 月中旬）は適切か

はい	16 名
いいえ	2 名

・活動期間（３伯４日）は適切か

ちょうどよい	14 名
短すぎる	2 名
長すぎる	1 名
無回答	1 名

・事前に集まったことはよかったか

そう思う	8 名
やや思う	6 名
あまり思わない	1 名
思わない	3 名
無回答	0 名

・グループ形式のワークショップはよかったか

そう思う	9 名
やや思う	5 名
あまり思わない	1 名
思わない	3 名
無回答	0 名

・ファシリテータ（第三者の立場での運営）はよかったか

そう思う	10 名
やや思う	4 名
あまり思わない	1 名
思わない	3 名
無回答	0 名

□参加者からの声（アンケート自由記入より一部抜粋）

［事前交流会］
メンバー全員が強制でも、事前に揃ってもらわないと困る。
もっと集まってもいいくらい！

［活動全体］
村人の方々は学生と交流したいという意識と姿勢が強かったのに、受け側の学生がそれを面倒くさがっていて、ボランティアの主旨を本当に理解して申し込んだのか疑った。こっちも巻き込まれて消極姿勢にイラついた。
行っている私たちが歓迎されてすごくいい待遇でびっくりしました。

［ファシリテータについて］
チームがまとまりにくい時に居てくれてすごく助かります！
皆さんが僕たちが動きやすいようにしてくださったり、まとめて下さったり、感謝しています。

■各学部
文化学部スターティング・セミナー2012

□趣旨

文化学部新入生のネットワークづくりと、「今日から自分は文化学部の一員だ」というアイデンティティ形成、および、学びにおける受け身のスタンスをリセットする機会の創出。

□概要

日　時　4 月 5 日（木）14:00-17:00
場　所　11 号館各教室
参加者　セミナー参加者 225 名（2012 年度文化学部新入生全員）、スタッフ 34 名（教員 8 名、在学生スタッフ 23 名、学生ファシリテータ 2 名、F 工房スタッフ 1 名）

□内容

［事前準備］

「文化学部スターティング・セミナー2012」担当教員 3 名と F 工房スタッフ 1 名が事前にプログラムをデザインし、その内容を 2012 年 3 月 28 日実施の事前研修会で当日運営するスタッフと共有した。

［当日のプログラム］

参加者を 7 つのクラスに分けた後、ペアやグループになって漢字を使いながら自己紹介を繰り返し行うアイスブレイクゲーム「もじりんぐ（F 工房提供）」を実施。

後半は、「グループで文化研究にまつわる期待と不安を共有するワーク」と「クラス全体で、大学生活全般にまつわる期待と不安を共有するフォーラム」を実施。特に前者のグループワークは、今年度新たに実施したプログラムである。文化学部での学びについて興味のある分野を各自選び、それをグループで共有するというものである。後者のフォーラムに関しては、大学生活全般に対して不安に思うことを教員や先輩学生に質問することを中心に不安を和らげる内容とした。各クラスの運営は、教員・在学生スタッフ・学生ファシリテータ・F 工房スタッフがチームを組んで行った。

［スタッフふりかえり］

4 月 23 日（月）17:00-18:30 にスタッフ 7 名でふりかえりを行い、アンケート集計結果をもとにセミナーの全体の成果と課題を共有した。

□成果・課題

どのクラスにおいても、新入生と運営者のあいだに短時間の内にラポールが形成され、それによって醸成された支援的な雰囲気のなか、新入生と運営者が一体となり、プログラムが静かに盛り上がりつつ進行していったことが、スタッフふりかえりの場で共有された。

特に、「もじりんぐ」は短時間でのラポール形成に威力を発揮した。

後半の「フォーラム」は、もう少し時間をかけ、新入生の大学生活に対する不安を教員や先輩学生がじっくり聞きながら和らげる機会とした方がよいとの意見が出された。

司法外国語プログラム特別講演会
「災害と外国人～ウチらにもできること～」

□テーマ・趣旨

大規模災害と関連した外国人支援をテーマに、日常のコミュニケーションの大切さ、語学を学ぶ意義に気づくことを目的とする。

□概要

日　時　　5 月 30 日（水）13:15-15:00
場　所　　12 号館 12303 教室
参加者　　学生 4 名（本学のみ）、教員 2 名、職員 3 名、その他一般 1 名

□内容

導入のワーク「なんて書いてあるのかな？」

スライドに外国語で情報を掲示。各自 1 枚ずつその情報を読み解くための「ヒント」を書いたカードを配付（お互いに内容はわからない）し、お互いに協力して、掲示する情報から指示通りの行動をとる。制限時間は 10 分。

その後、ふりかえりを行い、ことばがわからない状況での緊急事態での自分の行動を通して、在住外国人が急な災害にあったときの心境について話し合った。

小講義「災害と外国人支援」

・被害と支援の歴史》
関東大震災、阪神・淡路大震災、東日本大震災の 3 つの大規模災害の発生時の、外国人への対応について解説。

・相談事例より
「外国人地震情報センター」に寄せられた約 1,000 件の相談を分析し、被災直後と復興期のそれぞれのニーズを明らかにした。

・必要とされること
外国人からのニーズとそのときの社会情勢をふまえ、支援のために必要なことを解説。多言語対応はもちろん必要であるが、むしろ肝要なのは支援システムを支える機能や、行政機関等との交渉である。

・3 つの障壁
支援現場に存在するさまざまな困難を、「制度」「コミュニケーション」「文化・習慣」の 3 つに分類して解説。

・地域での取組み～京都市の場合
京都市国際化推進プラン（平成 20 年策定）、京都市基本計画（平成 23 年策定）に組み込まれている多文化共生／地域国際化の推進のための施策を紹介。

・うちらにもできること
災害時に備えて、日頃からの関係性構築も含めて「すること」と「しないこと」に分けて説明。

・多言語による情報提供
インターネットで簡単に検索できる多言語情報のサイトを紹介。

発展のワーク「どこに情報があればよい？」

外国人に情報が届くために効果的な場所はどこか、グループに分かれて話し合い、結果を発表。カフェや地域の掲示板の他、学内リソースとして国際交流センター等の案が出された。最後に、外国人を災害弱者にしないためにどのようなことができるか意見交換を行った。

□成果・課題

融合教育という学際的な分野で、かつ、具体的なアウトプットが求められる外国人施策について、行動変革の必要性に気づくという結果を導き出すことができた。大規模災害という、ある意味で平等な機会において、それぞれの背景や肩書に関係なく協力しあう姿勢を、参加者のワークショップの行動から再認識することができた。

司法外国語プログラムは、刑事司法のほか多文化共生の推進力となる公務員等の育成も視野に入れており、このような形でのワークショップは具体的施策の立案につながるもので、ファシリテーションの手法の有効性が高いと感じた。

□参加者アンケート結果（回答者：10 名）

《属性》　学生 4 名、教員 2 名、職員 3 名、その他 1 名

・イベントを知った媒体

ポスター	0 名
POST（電子掲示板）	6 名
関係者よりの口コミ	4 名

・これまでの知識

よく知っていた	0 名
だいたい知っていた	2 名
よく知らなかった	6 名
まったく知らなかった	1 名
記入なし	1 名

・時間設定

ちょうどよい	8 名
短い	2 名
長い	0 名

・場所

ちょうどよい	9 名
狭い	0 名
広い	0 名
記入なし	1 名

・今後の参考になったか

そう思う	9 名
やや思う	1 名
どちらともいえない	0 名
あまり思わない	0 名
全く思わない	0 名

□参加者からの声（ふりかえりシートより一部抜粋）

・「導入のワーク」から得た視点や学び。
自分自身が外国にいたら何もできないだろうという失望感、日本にいたら何かできることがあるという希望。
災害発生時は「状況が全くわからない」というのをあらためて考えさせられました。
自分から積極的に動いて情報収集する（人とかかわる）ことが大切だと思った。

・「災害時の外国人支援」から得た視点や学び
日頃のつながりがあればこそ。
言語ができなくとも、言語ができる人の手助けならできそうなことがわかった。
いざとなると的確な行動が出来るかはわかりませんが、このようなお話しを耳にしておくということは大切だと思いました。

・「発展のワーク」から新たに得た視点や学び
情報の発信の仕方も難しいと思いました。
リスクマネジメントとクライシスマネジメントを分けて考える必要があることを再確認した。

・その他感想など
もっと外国人支援のことについて考えたいです。
ワークショップ形式の長所を強く感じました。
かなり、おもしろかった。最初にグループに動くところがいい。

３）授業の支援

■キャリア形成支援教育科目

キャリア・Re-デザインⅠ

《授業運営》

□授業の趣旨（シラバスより引用要約）

モチベーションの低下により、大学から職業世界への移行に関して困難を抱える学生を主な対象とした科目。【〈自己開示〉～〈自己概念の確立〉～〈社会への目線づくり〉～〈キャリア意識の再構築〉】というプロセスをたどることで、受講生のモチベーション再発見とキャリア形成を支援する。

□概要

日　時　　［春学期］不定期水曜日 3-4 限連続授業および 1 泊 2 日の合宿授業
　　［秋学期］不定期水曜日 3-4 限連続授業および 1 泊 2 日の合宿授業
場　所　　［春学期・秋学期共通］
〈初回授業〉5 号館 5302 教室、5303 教室
〈通常授業〉5 号館 5221、5222、5223、5224、5225、5226（秋学期のみ）の各演習室
〈合宿授業〉京都市野外活動施設「花背山の家」
参加者　　［春学期］受講生 51 名、ファシリテータ 19 名（教員 8 名、事務職員 4 名、学外関係者 1 名、学生 5 名、F 工房スタッフ 1 名）
　　［秋学期］受講生 118 名、ファシリテータ 23 名（教員 9 名、事務職員 5 名、学生 8 名、F 工房スタッフ 1 名）

□授業運営

第 1 回（オリエンテーション、全体授業）

「アートコミュニケーション」と「自分史を語る」という、2 つのワークショップを実施。前者を通して、非言語のコミュニケーションを通じて自己/他者を意識化し、後者ではライフストーリーの語りを通じて対話を開始することを意図している。これらのワークを体験した後に受講手続きを行い、希望した学生が受講することになる。

第 2 回（クラス授業）

クラスでの初顔合わせ。アイスブレイクワークを中心に行いながら、クラスが自らの居場所となるよう受講生どうし、受講生とファシリテータの関係性を深める。

第 3 回（合宿授業）

非日常の時空間において、短期集中的にチームビルディングを推し進めつつ、自己認識作業の深化を図る。また、そのプロセスで巻き起こる「対話（価値観の衝突や摺り合わせを伴うコミュニケーション）」を通じて、受講生の有能感を醸成しつつ、さらなる関係性の深化も図る。さらに、第 4 回で実施する「社会人インタビュー」のガイドを作成しながら、

社会へ目線を向ける。

第4回（クラス授業）

「社会人インタビュー」の実施。グループごとに2人の社会人（今までキャリアチェンジを行ってきた人を中心に招聘）へインタビューをし、仕事世界で働く他者と対話をする。

第5回（クラス授業）

「社会人インタビュー」を個人・グループでふりかえりながら、そこでの学びを個人に落とし込む。そして、自らの課題を整理しつつアクションプランを作成する。

第6回（クラス授業）

クラスメンバーに向けた「5 分間スピーチ」の実施。自ら作成したアクションプランを発表することで、自己/他者とのより深い対話を実践する。

□成果・課題

今年度で開講から丸7年を迎えた同科目では、運営者がファシリテータとなって受講生の支援を行う文化が完全に定着した。また、クラスごとでの〈打合せ～プログラム運営～ふりかえり〉の一連のプロセスも完全に浸透し、それを全体で常に共有しつつ授業運営を行う体制も安定的に実践された。

また、本学事務職員が職員研修の一環として授業にファシリテータとして参画するプログラムが今年度も継続的に実施された。（下記参照）

さらに、同科目内で蓄積された知見をもとに、同科目の発展型授業である「キャリア・Re-デザインⅡ」が2013年度より開講することが正式に決まった。これは、言語での自己表現を通した「対話」を繰り返し行うことで、個としての自己を活性化し、自らの力で他者との関係を築きつつ自立した大学／社会生活を営むことができるようになることを支援する科目となる。今後は、両科目間での情報交換によって、ファシリテーションを取り入れた学生支援の益々の発展が期待される。

一方で、今年度の課題としては、各クラスによる事前打ち合わせの時間確保に関する問題が指摘された。各クラスの担当者は、〈本学の教職員、学生〉と、〈（普段は学外で仕事をしている）非常勤講師、専門職者〉らがチームを組んで授業を運営しているが、その組み合わせによっては、事前打合せの時間が十分に確保できないクラスも存在した。これにより、授業に対する各クラスの準備にも差が生じているとの指摘であった。この問題に関しては、授業開始30分前に各クラスで打合せを行うことで対応しているが、今後はファシリテータの組み合わせを考慮するなどの方法も考えたい。

《職員ファシリテータ研修》

□概要

日　時　　［春学期］ 4 月 11 日（水）10:00-12:00
　　［秋学期］10 月 10 日（水）10:00-12:00

場　所　　F 工房　作業場

参加者　　［春学期］各部署より推薦された本学事務職員 5 名
　　［秋学期］各部署より推薦された本学事務職員 3 名

□内容

ファシリテーションの歴史や理論的背景について、「グループダイナミクス」や「ラボラトリー方式体験学習」、「Kurt Lewin などの研究者」などに触れながら紹介した。その後は「キャリア・Re-デザインⅠ」科目の目的や受講生像、運営体制や役割を紹介し、最後はファシリテータとして「何を観察するのか」について、参加者どうしで考える機会とした。

□成果・課題

ファシリテーションの概念がどのようにしてできたのかや、その特徴について参加者が学ぶ機会とできた。また、参加者が実際にファシリテータとして参画する「キャリア･Re-デザインⅠ」について知る機会にもなった。

一方で、この研修で学んだことがどのくらい授業現場や本人の所属での日常業務に活かせているのかについては、まだまだ未知数な部分が多い。

また、職員ファシリテータが他のファシリテータとチームを組むに際し、チーム間でのコミュニケーション不足が露呈するケースが散見された。これは、ボランタリーな意識が根底にあるファシリテータと、就業規則がはっきりしている事務職員との間のせめぎ合いとも言える。本科目運営において、どちらもなおざりにすることはできないため、今後とも職員ファシリテータが本科目において活躍できるあり方を模索し続けることが求められる。

自己発見と大学生活

《授業運営》

□授業の趣旨

本科目は、1 年次生の春学期を対象に開講している初年次向けキャリア形成支援教育科目である。今年度は、70～120 名 1 クラスを 15 クラス設け、合計約 1500 名の新入生が受講した。

授業は、大学に入学して間もない受講生が、大学入学という人生の一つの節目をキャリアデザインの大きなステップと捉え、大学生活、そしてその後の社会や仕事、働くことについて、受講生同士、担当教員とともに考えながら、将来に向けての一歩を踏み出すきっかけをつくることを目的としている。(2012 年度シラバスより引用)

「キャリア」という視点から自己と他者、そして大学生活や社会という環境を視野におきながら、自身の大学生活について考え、自律的な大学生活を営むために、大学生活における自分用のマップ作りを行う科目であるとも言える。同時に、受講生にとって「京都産業大学がホームグラウンド（居場所）となる」ことも目指しており、安心して大学生活での活動ができるようなマインドセットを形成することを本科目では支援している。

□概要

日　時　　［春学期］毎週月曜 1、2 限、火曜 1、2 限、木曜 1、5 限、金曜 1 限（木曜 1 限以外は、同一時限に複数クラス開講）

場　所　　5 号館 5301 教室、5405 教室、11403 教室、115 教室

参加者　　［春学期］受講生 1499 名、教員 13 名、キャリア科目担当学生ファシリテータ（キャリファシ）20 名

□授業運営

本科目では、授業の教案集である「ティーチング・ガイドブック」をもとに、全クラス同一コンテンツにて授業運営を行っている。各回の授業内容は以下の通り。

第 1 回　オリエンテーション　―目的、進め方、ルール等を学生、教員で共有―
第 2 回　アイスブレイク　―できるだけ多くの人と話してみよう―
第 3 回　大学生活について考える　―今までとこれから､大学生活を充実させるって何？―
第 4 回　「自己発見レポート」から考える自分　―今の自分の立ち位置を知る―
第 5 回　他者を通して知る自分　―価値観ゲーム「幸せの条件」―
第 6 回　自己紹介をしてみよう　―自分を伝えることの難しさ―
第 7 回　先輩の体験談　―どのようなキャリアをデザインしているのか―
第 8 回　キャリア・インタビュー発表　―大人から学ぶキャリア・デザイン―
第 9 回　社会人の体験談　―どのようなキャリアをデザインしているのか―
第 10 回　チャレンジシート「私の大学生活」発表　―どのような大学生活を送るか―
第 11 回　私たちの考える大学生活　―グループ発表準備①―
第 12 回　私たちの考える大学生活　―グループ発表準備②―
第 13 回　私たちの考える大学生活　―グループ発表準備③―

第 14 回　クラス発表会　―代表チームを選ぶ―
第 15 回　まとめレポート
上記以外に、計 2 回の全体会を開催。4 月 11 日（水）3 限に「全体キックオフ会」、7 月 21 日（土）午後に「全クラス合同発表会」をそれぞれ実施。

□成果・課題

F 工房は、本科目のプログラムがデザインされる段階から主担当教員と協働を行ってきた。従って、参加型プログラムのほとんどに、F 工房が蓄積してきたノウハウが活かされる形となった。また、授業運営の場面では、教員やキャリファシは授業や受講生を支援するスタンスを主としてかかわる形となった。つまり、至るところにファシリテーション的要素をちりばめた授業になったと言える。それを全新入生のおよそ半分が受講したことになるため、本科目を通じて、ファシリテーションの全学普及が加速したと言える。本科目は、次年度も規模を拡大して開講予定であるため、将来的には本学の半分以上の学生が、本科目の受講をきっかけにファシリテータマインドに触れることになる。

一方で、受講生数の増加が授業の質を落としているのではないかとの指摘が相次いだ。とりわけ、1 クラスの受講生数が 100 名を超えると、従来の運営方法だけではカバーしきれない雰囲気（多くの中に紛れてワークに取り組まない、授業の当事者意識が持ちにくい、など）がクラス内に醸成されてしまうため、授業の質の低下につながった、などの指摘が担当教員やキャリファシからなされた。これらをもとに、次年度の受講生数は最大で 85 名とすることになった。

本科目は、全 15 クラスで固定机の講義室を使用したグループワーク中心の参加型授業を実施してきたため、そこで得られたファシリテーションの知見はかなりの量に上った。グループ分けの方法やグループでの座席の座り方、どのようなワーク運営だと受講生は集中してワークに取り組めるのかなどについての知見が多く収集できた。これらは、既に次年度の「ティーチング・ガイドブック」に反映され、授業運営のさらなる向上につながることが期待されている。

《キャリファシ活動支援》

□概要

日　時　［キャリファシの集い］
4 月 25 日（水）13:15-16:30、5 月 16 日（水）15:00-17:00
7 月 11 日（水）13:00-16:30
［キャリファシふりかえり合宿］
8 月 7 日（火）-9 日（木）

場　所　［キャリファシの集い］12 号館 12523 演習室（4 月 25 日のみ）、F 工房作業場
［キャリファシふりかえり合宿］神山研修室棟

参加者　［キャリファシの集い］のべ 24 名
［キャリファシふりかえり合宿］18 名

□内容

キャリファシとは「キャリア科目担当学生ファシリテータ」の略称で、本学キャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」において、先輩学生として授業をサポートする無償の活動と役割のことを言う。今年度は、公募で集まった20名の学生が同活動に参画した。

F工房は、キャリファシ活動の支援として、授業開始前に「キャリファシ研修合宿（2012年3月9日、10日）」を実施し、授業期間中には「キャリファシの集い」の開催。また、授業終了後には「キャリファシふりかえり合宿」を行った。これらの研修では、キャリファシ活動に必要なスキルや知識の習得を行いつつ、キャリファシどうしの情報共有やキャリファシが授業を通して経験したことを彼ら個人の学びに落とし込むことを目的として実施した。

また、授業期間中は、F工房スタッフも毎回の授業現場へ赴き、キャリファシのサポートを行いながら、自らもファシリテータとして授業に参画した。

□成果・課題

昨年度は「学生ファシリテータ」活動の一環として、同科目で行っていた活動を、新たに「自己発見と大学生活」だけに活動の範囲を限定した「キャリファシ」活動を立ち上げた。活動範囲を同科目のサポートに特化したことにより、他のF工房活動とは一線を画し、彼らの「キャリファシ」としてのアイデンティティ形成につながった。

一方で、彼らの中に「キャリファシ」としての自覚はあっても、「ファシリテータ」としての自覚は醸成されにくいきらいがあった。ただし、「キャリファシ」は、結果としてファシリテータ的な役割を授業内で果たしていたことから、F工房としては彼らがファシリテータとして成長する過程を支援できたと考えられる。

さらに、2013年度の「キャリファシ」を募集するにあたっては、「自己発見と大学生活」科目の元受講生が多く応募してきた。このことは、授業内での「キャリファシ」の姿が受講生に大きなインパクトを残していたことの証左であると考えられる。

課題としては、授業内の「キャリファシ」の立ち位置が不明確であった点が挙げられる。「キャリファシ」は本来、授業の中において教員と受講生の間に立って授業を支援することが求められていたのだが、クラスによっては「キャリファシ」がイニシアチブをとって授業運営を行っていたところもあった。これは、「キャリファシ」を担当する学生にとって、授業の中には〈教える側〉と〈教えられる側〉の二者しか存在しないとの固定観念があったことが原因として考えられる。よって、次年度に向けては「キャリファシ」としての立ち位置を明確にしつつ、〈教える側〉と〈教えられる側〉の間に立つ「キャリファシ」としてのスタンスを研修等で事前に共有することが重要となろう。

その他キャリア関連科目でのワークショップ運営など

《大学生活と進路選択》

□授業の趣旨

2 年次生を対象としたキャリア形成支援教育科目。自分自身と将来を考え、今（大学 2 年次）だからこそ身に付けておくべきこと、考えておくべきことを取り上げる科目。

本科目において F 工房は、2 回目授業でアイスブレイクを運営し、12 回目もしくは 13 回目授業では、自分と対話しながら緩やかな選択体験を行うワークを企画・運営した。運営は、F 工房スタッフと学生ファシリテータが協働しながら行った。

□概要

日　時　　4 月 19 日（木）、6 月 28 日（木）、7 月 5 日（木）3 限、4 限
場　所　　5 号館 5301 教室、5405 教室
参加者　　受講生のべ 610 名（3 クラス合計×2 回）

□運営内容

4 月 19 日実施のアイスブレイクでは、受講生どうしがペアを組んで互いの共通点を探す「Common!! Everybody」と、グループメンバーの印象の変化を記録し互いにフィードバックする「第一印象ワーク」、そしてメンバー個々人が考える現在の仕事観を浮き彫りにする「もしも JOB」を実施した。

6 月 28 日、7 月 5 日の授業では、出される二択問題について、自分ならどちらを選択するかを選び、同じ選択をした人どうしでその理由について話し合う「２つの選択肢」ワークを実施した。

□成果・課題

前者のアイスブレイクは、定番のものと新たに開発したものとを組み合わせて実施し、クラス内に親和的雰囲気を構築することができた。また、後者のワークは、担当教員と事前に打合せをしたうえで新たに開発したものであり、授業の趣旨に即したワークとなった。

《自己発見とキャリアプラン》

□授業の趣旨

3 年次生を対象としたキャリア形成支援教育科目。キャリアデザインの「手段」として、就職活動をいかに意味あるものとして取り組むかを、受講生、教員がともに考える科目。

本科目において F 工房は、3 回目授業でアイスブレイクを運営し、9 回目授業でペアワークを通してコミュニケーションの勘所を押さえるワークを企画・運営した。

□概要

日　時　　4 月 24 日（火）、6 月 5 日（火）、11 日（月）4 限、5 限
場　所　　5 号館 5302 教室、5303 教室
参加者　　受講生 1097 名（8 クラス合計）

□授業運営

4 月 24 日実施のアイスブレイクは､同科目全 8 クラスのうち 2 クラスを対象に実施した。内容は、「大学生活と進路選択」のアイスブレイクと同一コンテンツにて実施した。

6 月 5 日、11 日は、残る 6 クラスを対象に実施した。担当教員との打合せの結果、様々な人とペアになって話すことを通じて、自分にとっての「良い話し手・聞き手」とは何かを考えるワーク「伝えてみよう」を開発し、実施した。

□成果・課題

アイスブレイクでは、「大学生活と進路選択」と同様に、親和的雰囲気を構築することができた。また、同一コンテンツであっても、実施する学年によって受講生の反応が変わることが分かった。具体的には、「Common!! Everybody」ワークを実施した際、1、2 年次生に比べて 3 年次生の方が、より多くの人と共通点を見つけていた。これは、3 年次生は素早く的確に共通点を見つけることができていたのに対して、1、2 年次生の方は 1 人の人とじっくり話す雰囲気があったことが理由として考えられる。

6 月に実施した「伝えてみよう」ワークでは、ペアになって話すことにフォーカスし、相手に自分のことを伝えるためにはどうしたらいいか、また相手の話を聞くうえではどういう点に気を付けたらいいかについて、体験を通して学ぶ機会となった。また、就職活動が近いということもあって、本ワークに対して、しっかり取り組んでいる様子が印象的だった。

■学部専門科目
フィールド・リサーチ（法学部法政策学科）

□授業の趣旨（シラバスより引用要約）

学外の実務の現場での研修を通じて学外の人と交流し、実社会に対する関心と問題意識を強めるとともに、現場での課題解決について考察する科目。

人間の安全保障、社会安全、行政、社会政策、法政歴史の 5 つのコースから 1 つを選択。3 年次選択科目。

*F 工房ではこのうち「フィールド・リサーチ入門」、「報告書の作成」での授業運営を支援した。

《フィールド・リサーチ入門》

□概要

日　時　　5 月 9 日（水）3-4 限

場　所　　4 号館 4F 演習室

□内容

自己紹介（全体）

氏名、コース、受講の動機を紙に書き、全体で自己紹介。

自己紹介（グループ）

選択コース別にグループを作成。社会安全コースは人数が多いため 3 つに分割、法政歴史は1名のみのため行政コースのメンバーと一緒にワークを実施して全6グループとした。

グループ内で、フォーマットに沿って「部活」「家族」など 15 のテーマのなかから任意の 3 つを選択し、それぞれ 1 分程度のスピーチ形式で自己紹介を実施した。

アイスブレイク

担当教員の 1 人の頭文字である「く」で始まる単語を、メンバーでできるだけたくさん出し合い（制限時間 3 分）、その中から「自分たちだけのグループが思いついた」と思われる単語を 3 つ選び発表する。思いついた単語の数を 1 個 1 点としてまずカウントし、選んだ 3 つの単語が他のグループになければ、単語 1 個につき 3 点加点して総合点を競う。点数の少なかったグループから順にグループワークの結果を発表することとした。

小講義「フィールド・リサーチのイメージをつかもう」

他の授業で、学生が実際にフィールドワークを実施し、発表した資料を紹介し、文献やインターネットのみの情報と現場を見て得られる情報のちがいを提示。

個人ワーク「メモとり実習」

Input（きく）と Output（書く）を同時に行う実習。ラジオニュースの音声を一字一句もらさず書き留める（ディクテーション）。各グループでとったメモを交換し、それぞれに残

した情報がちがうことを確認した。

グループワーク「ドキュメンタリー作成実習」

「市場の朝」をテーマとした音声なしの映像（6分30秒）を見て、各自メモをとる。得られた情報にグループごとで独自の解釈を加え、プレゼンテーション資料として1枚の画用紙にまとめ発表する。発表はアイスブレイクで決めた順に行い、コース担当教員がコメント。その後、各グループでふりかえりを実施した。

小講義「フィールド・リサーチのその先」（担当教員と合同で実施）

まとめとして、フィールド・リサーチの授業では報告書を作成する課題があること、そのために必要なプロセスとして、「見る→メモる→伝える」という3つの段階があり、今日はそのためのウォーミングアップであることを再確認した。また、フィールド・リサーチでの興味関心を深めるベクトルとして、「理論」と「表現」の2例をあげ、理論を深めると論文作成（研究者）、表現を深めると視聴覚的資料（クリエイター）へとつながることを提示した。

□成果・課題

いくつかの実習を組み合わせることで、フィールドワークの楽しさと難しさを疑似体験する機会を提供できた。特にドキュメンタリー作成実習では、それぞれの解釈を統合してひとつの作品とするプロセスから、メインテーマ、ストーリーづくり、表現（モチーフ、構成）のすべての面において、合意形成のためには綿密な議論が必要であること、またチーム・ビルディングの成否が結果を左右することを学生自身が実感できた。

また、担当教員がグループメンバーに熱心にアドバイスする姿も見られ、学生どうしだけでなく教員との関係づくりにも寄与できた。

□参加者からの声（ふりかえりシートより一部抜粋）

・「フィールド・リサーチのイメージをつかもう」から学んだこと

どの様にまとめるのか、どの様に表現するのか。
今回受講する前は、フィールド・リサーチというものがどういうものなのかイメージがわかなかったが、受講後は具体的なイメージをつかめた。
初めて見る人、自分たちが発表することについて知らなかった人に対して、写真やインタビューを用いて分かりやすく、実際にイメージしてもらうことは伝わりやすいと感じた。
見て、伝えるということの難しさを学びました。何も知らなくても見て分かるような作品を作るというのは難しいので、工夫が必要だなと思いました。
見たものをメモ（記録）し、伝えることの難しさが印象深いが、流れを疑似とはいえ体験し学べたと思う。

・「メモ取り実習」から学んだこと

頭がついていかない部分があった。少し「ん？」と思うことがあっても頭をきりかえてメモを続ける必要がある。
情報を分析する力、まとめる力
メモを取ることはむずかしい。
メモを一人が取りそこねてもグループで助け合える。
何もメモしきれていない自分の未熟さ。覚えられないし、手も動かない。
外国語でのディクテーションはしたことがあったが、日本語のディクテーションがこんなにむずかしいとは思っていなかった。また共有すれば分からないところが解決するというわけでもないなと気づきました。

・グループワークでがんばったこと、むずかしかったこと
具体的な例えを使った表現の大切さ
みんなそれぞれ独創的なアイディアがあると思った。実際に自分がみた映像を他人に伝える難しさを知った。
映像から想像をふくらませることがとても危険だと感じました。創造をふくらませるのではなく、インターネット等で調べることで事実を載せていくことが肝心だと思いました。
5 人で 1 枚の紙を書くのは、それぞれの頭の中のレイアウトが違うから難しい。
自分が見たことをメモにするのは、とにかく気づいたことを書いておいて、後から班で情報を共有するときに別の見方を気づかされた。集中しておかないと情報が読み取れない。
とにかく「話す」ことに気をつけました。でも、「伝える」となったら、難しさが上がった気がします。

・その他感想
時間が短く感じる内容でした。
グループワークは不安だったが、みんなで協力しあって一つのものをつくることができたのでよかった。他のグループの意見も聞けてよかった。
行政プログラムのみんなとある程度仲良くなれたので、ワーク時など気をつかわずに話し合えてよかったです。
たとえ興味がないことでも、人数が少ないので、気を上げて大きく反応し、またメンバーをもりあげていかないといけないと思った。初めて来たが、楽しくやれそうで良かった。

《報告書の作成（情報のまとめ方）》

□概要

日　時　　10 月 3 日（水）3-4 限
場　所　　4 号館 4E 演習室

□内容

グループワーク「情報分類実習」

3 種類の色紙に漢字が 1 文字書かれたカード 24 枚を、5 分間の制限時間の中で、グループメンバー独自の基準で分類する実習。グループにより「目に見えるものと見えないもの」による分類、カードの色による分類などそれぞれ異なった基準での分類がなされた。

グループワーク「情報マッピング」

フィールドで見聞したこと、そこから気づいたことをキーワード化し整理する実習。発表用媒体となる 1 枚の紙の中心にフィールドワークを行った施設を書き、周辺に実際に見たもの、さらに周囲に背景や得られた気づきなどの情報を配置し、視覚的にわかりやすい資料を作ることをゴールとした。

□成果・課題

フィールドでみたものをテキスト化することの難しさを、学生自身が実感できるワークとなった。また、事実は比較的正確に書くことができたが、気付いたことと背景との関連づけができていないグループが目立った。短い時間のため根拠となる資料が十分読みこめていないこともあるが、表層的な感想を述べるにとどまっているところもあり、報告書の作成に向けての課題が明確になった。

久保ゼミ（法学部）授業支援

□授業の趣旨

裁判外紛争処理をテーマとする本演習科目において、クラスのアイスブレイクを図りつつ、コミュニケーションについて学ぶことを目的としたワークを実施。

□概要

日　時　　4 月 20 日（金）4 限
場　所　　4 号館 4G 演習室
参加者　　受講生 27 名

□授業運営

与えられた条件（人数比、男女比、学年比…）に基づき、自分たちでグループを決めていく形でグルーピングを行った。その後、メンバーの 1 人が与えられた紙に書いてある図形について口頭だけでグループメンバーに伝え、メンバーはそれを描いていくワークを実施。これを数回行った。

そして後半は「ほげげ語ゲーム」という、文化学部元教員が開発し F 工房がアレンジしたワークを実施した。これは、「ほげげ語」という架空の言語を操る「ほげげ人」をグループで 2 人決め、その 2 人は「ほげげ語」だけで会話をする。他のメンバーは「ほげげ人」のやり取りを観察しながら、最終的に「ほげげ語」の辞書を完成させるというゲームである。

□成果・課題

ゼミのテーマに沿いつつ、昨年度実施した形から更に改良を加えて実施することができた。また、新たな自己紹介の方法である「回覧板自己紹介」を担当教員との打ち合わせの中で開発するに至り、さっそく本授業でも実施した。また、この自己紹介の方法はかなり好評で、他の授業等でも積極的に実施するに至っている。

■学部初年次科目
プレップセミナー（法学部）

□授業の趣旨

1 年次の春学期の段階で、法学部で学ぶのに必要な基礎的能力や知識を身につけることを目的とした少人数演習科目。

本科目のうちの 1 クラスに、F 工房はチームビルディング体験とグループワークの練習を目的とした回に参加。運営を行った。

□概要

日　時　　5 月 11 日（金）1 限、7 月 24 日（火）1 限
場　所　　4 号館 4F 演習室（5 月 11 日）、404 教室（7 月 24 日）
参加者　　受講生 21 名

□授業運営

5 月 11 日の回では、全体でのアイスブレイクとして「サークルコレクション」を実施。その後、グループに分かれて情報共有ワークショップ「9 人のポジション」を実施。グループ体験をふりかえりながら、チームビルディングを推し進めた。

7 月 24 日の回は授業の最終回であったが、5 月 11 日に実施した「9 人のポジション」のリベンジを兼ねて、同じ趣旨の別ワーク「匠の里」を実施。さらに最後には、授業メンバー全員（先生も含む）へのコメントカードを記入し、それをクラスのメンバー全員へ手渡すワークも実施した。

□成果・課題

5 月 11 日の回では、担当教員との事前打合せのもと、アイスブレイクからグループワークまで良い流れで運営できた。しかし、実施したワークの難易度が思っていたよりも高く、時間内にどのグループも正解できなかった点が誤算であった。

7 月 24 日の回では、5 月 11 日の回の再チャレンジを兼ねて実施したが、結果的にどのグループもリベンジを果たせた。また、F 工房が提案したコメントカードは、教員も含むクラスのメンバーそれぞれが春学期をふりかえり、授業での互いの様子をフィードバックし合う機会を創出でき、授業の最終回に適した内容となった。

■融合教育
人事・労務の実務（法学部・経営学部）

□授業の趣旨（シラバスより引用要約）

フレキシブルカリキュラム「人事・労務プログラム」の基幹科目のひとつ。企業の人事担当や社会保険労務士などの専門家によるリレー講義形式。各回、講義の後にディスカッションの時間を設け、現場での具体的なイメージを身につける。

*F 工房ではこのうち「中間まとめ」での授業運営を支援した。

□概要

日　時　　5 月 2 日（水）2 限
場　所　　4 号館 4E 演習室

□内容

アイスブレイク「あらためて自己紹介」

学部・氏名と、本講義についての「最初のイメージ」「（実際受講してみて）現在の印象」「授業を通して得たいもの」を A4 用紙に記入して発表。

ワークショップ「ハロー！ワークス」

グループごとで「職業」を思いつくだけあげる（制限時間 5 分）。「公務員」のような大きな括りでなく、できるだけ具体的に業種まで明確にする。

ワークショップ「人事・労務の問題点共有」

仕事（主に企業）生活で遭遇するであろう問題点を、付箋紙を用いてピックアップする。ヒントとして、各世代でのライフイベント（結婚、出産、親の介護、定年等）を紹介してアイディアを誘導した。その後グループ発表と、担当教員も交えた全体議論を行った。

ふりかえりとシェア

自己紹介用紙の裏面に、「今日の授業で気づいたこと」「今後に期待すること」を記入、全員で共有した。

□成果・課題

グループワーク自体を経験したことがない学生がほとんどで、他者と意見を出し合うことでさまざまな視点に気づくということを、学習内容と結び付けて考えることができた。後半の議論では、学生の議論に教員が新たな視座を提供したことで、さらに多角的に人事・労務の問題点を考える場となった。

融合教育という、複合的な力を身につける科目の目標によい形で関与できたと思う。事後、担当教員からもクラスの雰囲気が活性化したとのコメントをいただいた。

■その他
アイスブレイクの実施（初回授業等）

《イタリア語エキスパートⅠ（共通語学）》

□授業の趣旨

共通教育科目の語学授業で、他の語学授業とは違い、週に 4 コマ（他の「楽しく学ぶ…」は週に 2 コマ）同一メンバーにて開講されるのが特徴である。通年科目。

□概要

日　時　　4 月 9 日（月）4 限
場　所　　12 号館 12523 教室
参加者　　受講生 8 名

□授業運営

初回授業のアイスブレイクとして、F 工房定番の「Common!! Everybody」をイタリア語版に改良した「Ciao a tutti !」を実施。タイトルだけでなく、ペアになった時のあいさつ、ペアを解消する時のあいさつをイタリア語で行う工夫を取り入れている。なお、本ワークは、担当教員との協働によって 2011 年度にアレンジされたものである。

後半は、全体で 1 つの円になりフリップに「名前、学部、出身、知っているイタリア語」を記入し、全員で共有するワークを実施した。

□成果・課題

アイスブレイクを通して、クラスメンバー全員が出会うことができ、クラス内の親和的雰囲気の構築につながった。また、担当教員からは、初回のアイスブレイクによってクラスに一体感が生まれ、「ここが居場所だ」という雰囲気が醸成され、教員も授業へ行くのが楽しみであり、それが今（12 月時点）でも続いている、とのフィードバックを頂いた。

初回授業の重要性を改めて感じる機会となった。

《アメリカ文化演習Ⅱ（文化学部）》

□概要

日　時　　9 月 27 日（木）15:00-16:30
場　所　　11 号館 11301 教室
参加者　　受講生 8 名

□授業運営

担当教員のゼミ生である 3 年次生と 4 年次生の交流のためのアイスブレイクを実施。「サークルコレクション」、「Common!! Everybody」、「フリップ自己紹介」という定番の流れで運営した。ただし、運営に際してはその場の雰囲気を見ながらその場でテーマや方法を参加者に意見を聞きながら決めるというフレキシブルな運営方法を採用した。

□成果・課題

4 年次生と 3 年次生の交流の機会とすることができた。また、4 年次生は、昨年度も同様にアイスブレイクを体験しており、その時の内容までしっかり覚えている者もいた。これはアイスブレイクのインパクトの大きさの証左であると考えられる。

一方で、既に強固となっている横の関係から、縦の関係へと意識を向けるのはかなり難しいと感じた。終始、同じ学年どうしでしか話さない様子が見受けられたのは、その象徴とも言えよう。今後は、そのようなクライアントに対するアイスブレイクの内容を検討したい。

４）課外活動の支援
学生FDスタッフ 燦（SAN）presents『京産共創』プロジェクトⅡ
～京都産業大学をどう創っていくか～（運営支援）

《燦メンバーへの研修》

□テーマ・趣旨

本イベントは、本学学生 FD スタッフ「燦」が中心となって企画・運営を行い、本学の教職員学生がより良い京都産業大学のあり方について意見交換する機会を創出するなかで、大学改善の機運を盛り上げることを趣旨としている。

F 工房は、本イベント「京産共創プロジェクトⅡ」で実施された「しゃべり場（6 名ほどのグループになって与えられたテーマに沿った対話を行うグループワークの通称名）」でのファシリテータの振舞い方について、当日進行役（ファシリテータ）を担うであろう学生に向けた研修を行った（12 月 4 日）。また、学生による模擬「しゃべり場」の場にも参加し、その場の様子を観察しつつ、ファシリテータとして留意すべき点をアドバイスした（12 月 5 日）。

□概要

日　時　　12 月 4 日（火）17:00-18:30、5 日（水）13:15-16:00
場　所　　F 工房作業場（12 月 4 日）、教育支援研究開発センター長室（12 月 5 日）
参加者　　11 名（12 月 4 日）、9 名（12 月 5 日）

□内容

12 月 4 日の研修の前半では、「京産共創プロジェクトⅡ」の概要と「しゃべり場」でのテーマ設定について、その進捗を「燦」メンバー自身に確認する形で実施した。適宜、F 工房スタッフが気になった点について掘り下げつつ、留意すべき事柄などをアドバイスした。特に、「しゃべり場」でよくある〈発散～共有～混沌～収束〉の流れについての説明や、ファシリテータとして最も重要なのは事前の準備であって、当日の話の内容については参加者に任せればよい点などを中心にアドバイスした。

後半は、ファシリテータ役を置いたコンセンサス実習を行い、ファシリテータがメンバーの合意を得るまでのプロセスについて、体験から学ぶ機会とした。

12 月 5 日の研修は、「燦」のメンバーが「しゃべり場」のシミュレーションを行う様子を F 工房スタッフが観察し、ふりかえりの場において、観察者からのフィードバックコメントとして、ファシリテータとして留意すべき点についてのアドバイスを行った。

また、これらの観察からみえてきたことを F 工房スタッフが、「『しゃべり場』におけるファシリテータの役割と心構え」としてまとめ、「燦」メンバーに配布した。

□成果・課題

学生 FD スタッフ「燦」が企画した「しゃべり場」などのプログラムに沿った形でのファシリテータ研修が実施できた。また、実際のシミュレーションの場に参加し、その様子

を観察しながら、フィードバックを行うことでより実践に即したスキル習得を支援できたと考える。さらに、そこへのかかわりを通して、F 工房としてノウハウをまとめ、それを彼らと共有できたのも大きな成果であると言える。

一方で、「燦」の間でファシリテーションと言うと、「しゃべり場」を運営するためのスキルであるとだけ解釈されている嫌いがある。今後は、スキルを下支えするマインドの部分まで広く共有する機会を持てるようにしたい。

《京産共創プロジェクトⅡふりかえり会》

□テーマ・趣旨

12 月 14 日に実施された「京産共創プロジェクトⅡ」について、「しゃべり場」におけるファシリテータの振舞いや役割についてふりかえりながら、ファシリテータを担当した個人の学びに落とし込みつつ、さらなるスキルアップを目指す機会とした。

同時に、イベント当日に出た意見についても取り上げ、それらの意見を取りまとめつつ、それを今後にどう活かしていくかについて考える機会も持った。

□概要

日　時　　12 月 26 日（水）13:15-16:30
場　所　　教育支援研究開発センター長室
参加者　　9 名

□内容

ファシリテータとしてのふりかえり作業として、ファシリテータをして「ファインプレーだと思っていること」、「反省点、難しかったこと」、「他のファシリテータに聞きたいこと」をそれぞれ付箋に書き出し、全体で共有した。また、共有の際は時系列順（導入～アイスブレイク～発散～共有～まとめ、全体を通して、その他）ごとの模造紙を用意し、該当する部分に付箋を貼っていく形とした。そして、それぞれの意見に対して、書いた本人と周りの人とが意見交換をしながら、よりよい「しゃべり場」のファシリテータとはどのような振舞い方や役割を担うのかについて共有する時間とした。

後半は、イベント当日に出された様々な意見の中から、ファシリテータが印象に残っているものを出し合い、テーマごとに分けつつ全体で共有した。このふりかえりセッションは、時間の関係で１つ１つの意見について深く掘り下げるところまで至らなかった。

□成果・課題

イベントのふりかえりを通して、ファシリテータとしての成長は、体験をふりかえることによって加速することを改めて感じる機会となった。今後も「燦」においては、学内外の様々なフィールドで「しゃべり場」を運営する機会があると考えられるため、その都度協働や情報共有をしつつ、「しゃべり場」におけるファシリテータの１つのモデルを構築したいと考える。

体育会アメリカンフットボール部 ミーティング

□テーマ・趣旨

チーム・ビルディングに必要なコミュニケーション力をつけ、チームを活性化するためのワークショップ。

□概要

日　時　5 月 23 日（水）16:45-18:15、6 月 14 日（木）12:30-13:00、6 月 20 日（水）17:00-18:00、7 月 11 日（水）18:30-19:30

場　所　F 工房（作業場、道具箱）、総合グラウンドミーティング室（7 月 11 日）

参加者　アメリカンフットボール部員、マネージャー、コーチ、F 工房スタッフ

□内容

部活への思いの書き出しの個人ワーク、地域のアメフト振興行事に向けての「これからアメフトを志す子どもたちへのメッセージ」の作成他。

□成果・課題

コーチと選手のミスコミュニケーションの問題は根深く、一時の関与では限定的な結果のみとなった。ファシリテーションは環境づくりから行う必要があると改めて実感した。

ピア・サポーター合宿（プログラムデザイン）

□テーマ・趣旨

「ピア・サポーター」の新規メンバーでの新たなスタートに伴い企画された合宿でのコア企画「ピア・サポーターに必要な能力って何だろう？」のプログラムデザイン支援。

□概要

日　時　12 月 10 日（月）15:00-16:30

場　所　F 工房

参加者　教学センター職員（ピア・サポーター担当）2 名、F 工房スタッフ 1 名

□内容

担当者による企画書をもとに、グループワークの内容について検討。新入生のもつニーズを可視化し共有するため「大学生活で困ること」についての洗い出しを行い、出された問題点の対応窓口を職員がフォローする内容とした。

□成果・課題

職員自身がファシリテータを務めるということで、後方支援に徹することができた。後日、職員より合宿は成功裏に終了したとの報告をいただいた。

５）高大連携

■京都産業大学附属高等学校

ワークショップ「京産大附属高校がもし100人の村だったら」

□テーマ・趣旨

京都産業大学附属高等学校（以下本項、附属高）KSU コース 2 年生文系生徒を対象に、毎週月曜日の 5-6 時限に行っている「高大接続授業」の特別篇として実施されるグループワーク形式の授業。附属高教員との協議の結果、本年は「京産大附属高校がもし 100 人の村だったら」をテーマに社会調査を実施。ワーク過程や調査結果を通じて、コミュニティの多様性に気づき相互に尊重すること、自ら探究する学び方を経験することを目的とした。

□概要

日　時　　1 月 28 日、2 月 4 日、18 日、25 日（いずれも月）5-6 時限（13:20-15:10）

場　所　　京都産業大学附属高等学校各教室（京都市下京区）
　　京都産業大学　むすびわざ館ホール（京都市下京区）

参加者　　附属高 KSU コース 2 年生文系クラス（5 クラス計）188 名、附属高教員 6 名（担任 5 名、高大連携担当 1 名）
　　教職員ファシリテータ 4 名、学生ファシリテータ 15 名

□内容

［各回共通］

12 時 50 分に関係者が集合し、プログラムと資料の確認、および必要物品の配付を行う。授業中は各クラスのファシリテータと担任の裁量で運営し、終了後再度全員でふりかえりと次回の内容確認を実施。ふりかえり記録は学生ファシリテータが持ち回りで担当し、事後にメール等で共有。

［第 1 回］

全体オリエンテーション（むすびわざ館ホール）

初めに学年全員で集合し、目標やスケジュールを共有。参考事例として一昨年に学年全体に対して行った調査結果を公開した。

また、ファシリテータが全員壇上に上がり、担当クラスと簡単な自己紹介を行った。

グループ分け

男女混合 6〜7 人で 1 グループ、各クラス 6 グループとなるようにくじ引きで決定。

アイスブレイク・プレワーク「共通点グランドスラム！」

グループメンバー内で、1 人、2 人…とそれぞれの人数に該当する共通点をできるだけたくさん探すゲーム。お互いを知るための情報交換と、調査項目のヒントを得ることを目的に実施。同時にグループ名も決定しクラス内で発表。

ブレーンストーミング

調査項目案をグループ内で話しあい、おおよその方向性と具体的な項目を検討。また、必要に応じてメンバー間での役割分担をしておく。その後、グループごとで「実施したこと」「決まったこと」を報告して終了。

［第 2 回］

調査準備

調査に向けて、具体的項目を決定し、調査票などを作成。必要に応じて図書館などでの調べものをしたグループもあった。

実地調査

教室外に出て、各クラス一斉に調査活動。グループによっては、手分けして調査する生徒、集計をする生徒、発表用媒体を作成する生徒など役割分担をしているところもみられた。

調査が終了しなかったグループは、次の回までの 2 週間の間に自由に調査活動をしてもよいことを説明、発表用媒体となる紙を各グループに配付して終了した。

［第 3 回］

発表準備

発表用媒体となる A3 サイズの紙に、調査結果と説明事項などを記入。同時に発表の準備も行った。

クラス内発表

各グループ 5 分の持ち時間で、調査のテーマと結果、分析や考察を発表した。他のグループは評価用紙に「よかった点」「工夫を要する点」を各自で記入し、それを参考に翌週の全体発表に選出するグループを 1 つ選んで、選定理由を付して投票してもらった。

全グループの発表終了後、投票結果を発表。発表用媒体は代表グループのみ改良のため渡し、他のグループの分は回収した。評価用紙は回収し、次回のフィードバックのためにクラスごとで集計した。

［第 4 回］

全体発表（むすびわざ館ホール）

前週に選ばれたグループによる全体発表。各クラスの発表に対して、学生ファシリテータが講評を行い、記念品贈呈を行った。

クラスごとふりかえり

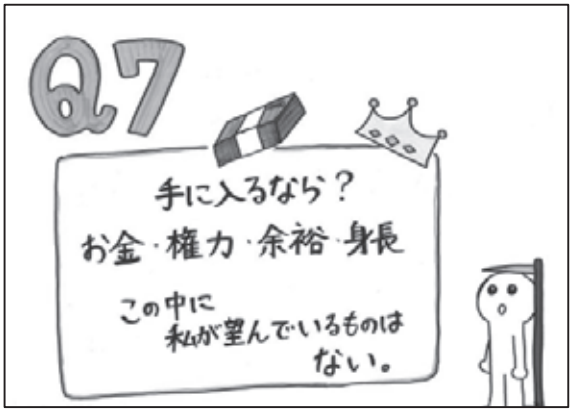
集計した評価用紙を全員に配付し、それらを参考に各グループでふりかえりを実施。最後にプログラム全体のアンケートとふりかえりを記入して終了した。

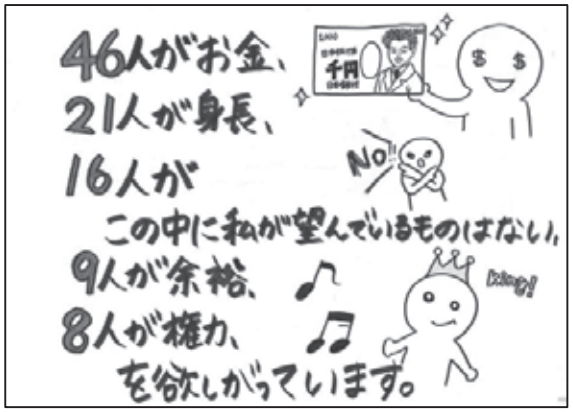
□成果・課題

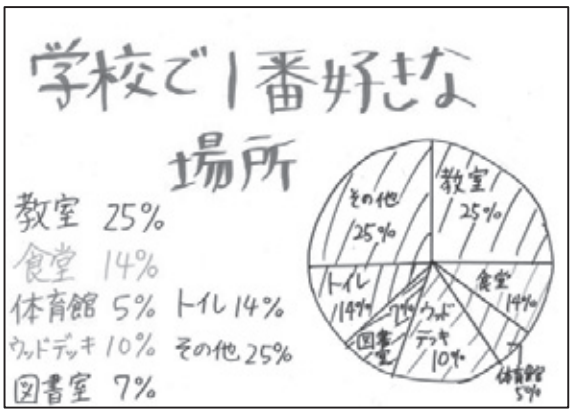
今回で5回目となる本プログラムであるが、高校教員側に経験者が増えてきたこともあり、担任の理解や積極的参画が以前に比べ増した。将来は高校側でイニシアチブをとって運営できる可能性が見えてきたように思う。

また、学生ファシリテータは公募制としているが、今回は附属高出身者が4名参加したことで、より生徒に近い立場からの運営参画ができた。出身者に参加理由を聞いたところ、本プログラムが楽しかったので、「今度は先輩として何か後輩のためになればと思って」参加したという声が聞かれた。教員としても、卒業生がこのような形で母校に協力してくれることはやりがいになるとの声があり、それぞれに有用感を得られる機会であることを実感した。

一方、4 回のプログラムでは掘り下げた学びを得られるための時間としては不十分であり、特に全体の核となる調査活動は実質1日しかとれないことで、母数の確保や調査項目の再検討等を行う時間がほとんどなかった。生徒からのアンケート結果にも「時間が足りなかった」というコメントが目立ち、結果に満足できなかった生徒が多かったことを示唆していた。また、教員からも、概ね楽しく進めることはできたが、興味関心が身近なものに限定され、十分な議論ができていないとのコメントがあった。回数を増やすことは難しいため、プログラム構成の改善等で対応してゆきたい。







《生徒が作成した発表資料》

（上）
附属高がもし100人の村だったら。
趣旨に沿って、調査結果を人数で表している。

（左）
高校生ならではの調査結果。それぞれにお気に入りの場所があるようだ。

□アンケート結果（クラス別集計）

◎多肢選択項目

	9 組	10 組	11 組	12 組	13 組
Q1．今回の授業はおもしろかったですか？					
おもしろかった	7	12	12	11	14
まあまあおもしろかった	22	20	18	21	19
あまりおもしろくなかった	7	3	1	3	2
全くおもしろくなかった	0	0	0	1	1
無回答	2	2	4	2	0
Q2．グループワークの中での自分の取り組みは、100 点満点で何点だと思いますか？					
最高値	100	100	100	100	100
最低値	10	30	30	10	20
最多値	50	70	100	50	70
中央値	60	70	72	70	70
平均値	60.2	64.4	71.9	65.9	67.4
Q3．「100 人の村だったら」という今回のテーマは取り組みやすかったですか？					
取り組みやすかった	10	11	12	7	18
まあまあ取り組みやすかった	25	22	17	23	12
あまり取り組みやすくなかった	1	2	3	6	3
全く取り組みやすくなかった	1	0	0	0	1
無回答	1	2	3	2	2

◎自由記入項目（一部抜粋、原文ママ）

・面白かったこと、勉強になったこと

協力することの楽しさがわかった。
チームワークの大切さが分かった。
アンケートに色々なものがあって楽しかった。自分では思いつかないものがたくさんあって凄いと思った。
いろんな人にアンケートができて楽しかった。知らない人とも喋れました。
普段気になっていることをこういう形で聞けて面白かった。
相手によく聞いてもらう方法の実行。
一つのテーマで様々な人がいることがわかった。
みんなでいろいろなネタを考えるのが楽しかった。
アンケートの結果を知ることができて、京産のことがわかったこと。
いろんな質問があったこと。調査され、その結果で自分がどこにいるのかが分かったところがおもしろかった。
他のクラスのしゃべったことがない人としゃべることができてよかった。
ランダムにチームがえらばれたので、ほとんどしゃべったことのない人ともしゃべれたし、おもしろかった。
5 分だけの発表なのに、こんなに日や時間がかからないと出来ないことなんだと分かった。
このチームがたのしかった。

・うまくいかなかったこと、反省点

代表発表で読まなかったこと。一回休んだこと。
もう少し準備する時間が会ったらよかった。少し準備不足だった。
ちゃんと役割分担ができてなくて、ダメだった。
やっぱり人前で話すのは緊張した。
人に頼りきってしまっていたところ。
顔を上げてしゃべれなかった。

思っていたよりも内容が簡単になってしまって、時間が足りなかった。
ギリギリになってから作業をはじめたこと。焦ってた。時間なくておちついてなかった。
セリフとんだりしていたのでちょっと残念やけど、それもふくめ思い出。

・その他感想など
初めてこんな経験をしたので楽しかった。またできたらやりたいと思った。
次は人任せにならずに、協力していきたいです。
テーマなど、調査内容の割に発表時間が 5 分と短いと思った。7 項目あるので、1 項目 1 分以内で説明しなくてはいけないのはしんどいと思った。
違うクラスのも見て新たな発見ができた。
3 年生のキャリア・デザインでは、もっとチームの活動に参加したいです。
自分たちは、表やグラフの資料はうまく作成できたけれど、パフォーマンスがだめだったと言われ、その通りだと思うし、自分ももう少し協力的になるべきだったと思う。
よい企画だとは思うけれど、時間が足りない。
またこんな授業をやってみたいと思いました。
グループでやったほうが 1 人でやるよりも意見がたくさんでてやりやすかった。これからは発表のやり方も考えていきたいと思う。
はやく大学に行きたいと思った。
今回のグループワーク、そしてテーマは、どちらかというと身近な事で、身近にいる人にアンケートをとったり質問をしたりとすすめていくので、多分、みんながどこか遠慮しあってやっていたように感じました。でも、コミュニケーション力や、まとめる事の大切さを学べたのは良かった。
全然うまくいかなかったしもう一度やってみたい

「キャリア・デザイン」プレゼンテーション大会審査

□テーマ・趣旨

本学附属高等学校 KSU コース３年生が１年間取り組んできた「キャリア・デザイン」科目（６つの企業の中から１つを選び、そこへのバーチャルインターンシップを通して、企業から与えられるミッションに取り組む PBL 型授業）での成果を発表し、その内容を競う校内プレゼンテーション大会に審査員として参加した。

□概要

日　時　　1 月 25 日（金）13:20-15:30
場　所　　京都産業大学　むすびわざ館（京都市下京区）

□内容

企業別予選会で選び抜かれた６つのチームが、企業から与えられたミッションに対する自分たちなりの提案を行った。その発表について F 工房スタッフは、他の審査員とともに審査を行い、大賞、第二席および審査員特別賞を決定した。

□成果・課題

今年で 4 回目を迎える同大会であるが、年々レベルが上がっている。とりわけ、今年の発表はどのチームもエンターテインメント性に溢れ、そのパフォーマンスは圧倒的な存在感とユニークさを誇っていた。

一方で、F 工房が 2 年生向けに実施しているワークショップ体験授業が、どの程度「キャリア・デザイン」に活かされているのかを、本発表だけから見るのは難しかった。

■兵庫県立東灘高等学校
人間関係を考える体験学習

□テーマ・趣旨

いろんな人と話して、後で話したことやその時の気持ちについて考えてみることを趣旨とした2時間のセッション。話すことに加え、話した時の気持ちなどを後でふりかえることで、コミュニケーションそのものについて考える機会を提供する。長期的には自己有用感の醸成と地域との関係づくりができる人間形成をめざす。

□概要

日　時　　3月13日（水）1-2時限（8:50-10:30）
場　所　　兵庫県立東灘高等学校（神戸市東灘区）
参加者　　東灘高等学校普通科2年生271名、教員6名（担任、学年主任、教頭）

□内容

トークセッション

人数と時間をフレキシブルに変化させて、以下のテーマで自由に対話を展開した。ファシリテータや教員も参加し、話の内容に多様性をもたせるよう工夫した。話すテーマは、はじめは誰にでも話しやすいものとし､時間の経過に従って内容を深めていく設定とした。

（各ラウンドのテーマ）

第1ラウンド（2人：3分）最近食べておいしいとおもったもの
第2ラウンド（2人：3分）これをしてると夢中になること
第3ラウンド（2人：3分）今不安に思ってること
第4ラウンド（3人：5分）3人の共通点をできるだけたくさん探す
第5ラウンド（4人：6分）今までの高校生活をふりかえって
第6ラウンド（6人：10分）残りの高校生活でやっておきたいこと

ふりかえり

ワークシート裏面の「ふりかえりフォーマット」を利用し、まず個人でセッションの感想や自分の行動について記入、その後同じグループ（第6ラウンドのメンバー）で共有した。予定より少し早くプログラムが展開したため、ランダムに生徒を指名し、話し合った内容や個人の感想などを全体に向かって発表してもらった。

□成果・課題

短時間のセッションのため、生徒の行動に大きく変化があるようなことはなかったが、全体が一堂に会したことで、学年の雰囲気がわかり、今後の支援に向けてよい示唆を得られた。特に、教員と生徒の心理的距離が良い意味で近く、長期的な取組みへの展望が感じられた。

６）地域連携
京都府警察本部警務部教養課育成推進室職員研修
「職場に活かすファシリテーション」

《入門》

□テーマ・趣旨

現職警察官の育成にあたって、グループ討議等に活かせるファシリテーション技法を習得する。

□概要

日　時　　4 月 10 日（火）13:00-16:00
場　所　　F 工房作業場
参加者　　教養課育成推進室職員 9 名、F 工房スタッフ 1 名

□内容

自己紹介

「刑事ドラマを見るか」「（見る人は）好きな刑事ドラマ」をテーマに全員で自己紹介。

講義「職場に活かすファシリテーション」

・ファシリテーションの意味と意義
目的を達成するための「名脇役」であり、交通整理に似ている。
・対象・具体例
職場や地域など、さまざまな現場で活用が可能である。刑事事件において自白を引き出すことも、ファシリテーションのひとつといえるのではないか。
・ツールを使おう
ホワイトボードや模造紙など、情報を視覚化できるツールの紹介。ミニワークとして、ファシリテーションが活用される現場の例を、付箋紙を用いた情報整理を実施。
・利点と限界
利点としては、参加者の主体性を引き出し「やらされている」感覚からの脱却がはかれる。しかし、個別の価値観を超えた行動が要求されるときにはファシリテーションの手法は不向きでむしろ指示・命令による行動が必要である。
・プロセスとは
グループ内で起こっていることにはコンテントとプロセスがあり、よりよい人間関係づくりのためにはプロセスに着目することが重要である。
・プロセスを阻害するもの
発信者、受信者それぞれに阻害要因がある。

ワークショップ「先輩警察官へのインタビューふりかえり」

2 グループに分かれ、最近実施された研修「先輩警察官へのインタビュー」で観察したことを、付箋紙に書き出して共有。その後、整理して模造紙にまとめ、発表した。

□成果・課題

近年、各都道府県警察においてファシリテーションが着目されているとのことで、かねてより人材育成の依頼を受けていたが、今年度に入り実現した。直近に、若手警察官による先輩警察官へのグループインタビューが実施されたこともあり、具体的事例からプロセスをふりかえる場とすることができ、受講者の腑に落ちるものとすることができた。

《応用》

□テーマ・趣旨

具体的に育成推進室が企画しているいくつかの研修を効果的にすすめるために、4 月に学んだことをもとに、より実践力を高める。

□概要

日　時　　1 月 9 日（水）10:00-12:00
場　所　　F 工房作業場
参加者　　教養課育成推進室職員 9 名、F 工房スタッフ 2 名

□内容

講義「職場に活かすファシリテーション」（その 2）

・リーダーとファシリテータのちがい
　人間関係を概念化した図を用いて、両者のちがいを説明。
・ファシリテータのアプローチ
　まずは傾聴、そこで得られた情報に自分の価値判断が加味されて、個々のアプローチとなる。
・研修プログラム立案に必要なこと
　目的（何のためにするのか、どういう変化を期待するのか）、場の設定（対象や内容によって適切なものを選ぶ）、「身につく」ためのしかけ（対象との親和性、気づきを促すふりかえりやフォローの機会、社会化、一般化）がセットになっていることが重要。

合意形成ゲーム「巨大隕石接近！」

もし近々に隕石が地球に衝突することがわかったら、グループとしてどのような行動をとるか、用意された 6 つの選択肢のなかからメンバーの合意によって 1 つを選ぶゲーム。

□成果・課題

それぞれの意見を可視化するなど、ファシリテータとしての基本的な所作を意識していることが見て取られた。意見交換は活発に行われたが、職位が明確な組織であり、お互いに声をかけるときに名前でなく職名（係長など）を用いることで、上下関係を想起させる点がみられた。研修内では特有の呼び名を作るなど、同じコミュニティのメンバーどうしでワークを行う場合、意図的にふだんの人間関係からの切り離しが必要な場合もあることを再認識した。

7）学外への協力
一橋大学ティーチング・フェロー トレーニング・コース
「第６回アカデミック・キャリア講習会 多様な学生にどう教えるか
- 授業の『場』の創造から専門教育の実践まで - 」

□テーマ・趣旨

一橋大学学生支援センター・キャリア支援室大学院部門が、アカデミック・キャリアを志望する大学院生等を対象として開催した「第 6 回アカデミック・キャリア講習会『多様な学生にどう教えるか―授業の「場」の創造から専門教育の実践まで―』」の第 1 部「授業の場の雰囲気づくり―支援型教育の視点から」において、講演を行った。

□概要

日　時　　1 月 31 日（木）13:00-18:00
場　所　　一橋大学　国立キャンパス（東京都国立市）
参加者　　約 20 名

□内容

授業の場の雰囲気づくりのための手法の一つである「アイスブレイク」について、本学の実践例を踏まえながら 90 分間の講演を行った。講演の前半は、全体で「アイスブレイク」を行い、場の雰囲気を和やかにしつつ、その楽しさを体験してもらったうえで、F 工房の説明や授業・研修の場などでの「アイスブレイク」の実践例の紹介を行った。後半は、「アイスブレイク」をデザインする手順を紹介しながら、最後は実際にグループで「アイスブレイク」を考案するプロセスを体験するプログラムを行った。

□成果・課題

本講習会では、本学学生の気質や授業の雰囲気、そのなかでの「アイスブレイク」の必要性などを「アイスブレイク」がもたらす効果とともに示すことができた。また、F 工房活動の中で蓄積してきた「アイスブレイク」のノウハウについて、それを整理した上で示すことができた。

また、講習会終了後の参加者との懇談では、大学や学生の多様化が進むなか、授業へのコミットメントを促すための「アイスブレイク」が、今後ますます必要になるだろうとの議論が展開されるなど、参加者の「アイスブレイク」に対する評価と感心は概ね高いことが窺えた。

８）学会・研究会への参加

《関西地区FD連絡協議会第5回総会　FD活動報告会2012》

□テーマ・趣旨

本学の教育広報の一環として、「キャリア教育におけるファシリテーションの役割」と題したポスター発表を行った。本学で実施している「ファシリテーション」を用いた学生支援の取組みの中から、「自己発見と大学生活」と「キャリア・Re-デザインⅠ」の２つの科目を取り上げ、科目の趣旨とそこでのファシリテータの役割についての発表とした。

□概要

日　時　　5 月 19 日（土）14:00-17:00
場　所　　京都大学　芝蘭会館（京都市左京区）

□内容

発表用ポスターは参考資料（p.80）参照。個別に対応する際は、特に『学生による学生支援』(「キャリファシ」、「学ファシ」）と『キャリア教育とファシリテーションの相性の良さ』を中心に説明を行った。

□成果・課題

「自己発見と大学生活」での「キャリファシ」の存在と、ティーチングガイドブックを用いての全クラス同一コンテンツでの運営の２点について、興味関心を示す参加者が多かった。一方で、学生ファシリテータが受講生へもたらす影響についてのエビデンスや、キャリア教育科目以外へのファシリテータの参画についての可能性など、いくつかの課題が指摘された。

《大学教育学会第34回大会》

□テーマ・趣旨

F 工房の学生支援に関する教育ポテンシャルを高等教育関係者に対し PR することを主目的に、本学会自由研究発表Ⅱ部会 14「学生・学習支援」において、「低意欲・中間意欲層の学生への組織的支援とファシリテーション」と題した発表を行った。

□概要

日　時　　5 月 27 日（日）9:00-12:00
場　所　　北海道大学高等教育推進機構（北海道札幌市）

□内容

ファシリテーションを用いた学生支援の取組みの中から、２つのキャリア科目（「自己発見と大学生活」、「キャリア Re-デザインⅠ」）を取り上げ、科目の概要・授業風景・成果な

どを紹介し、それを下支えしているファシリテーションの役割と、キャリア教育とファシリテーションの親和性の高さにフォーカスした内容で発表を行った。

□成果・課題

発表中には、相づちを打ちながら聴く聴衆や、発表者のユーモアに対して会場が笑いに包まれるシーンなど、F 工房の実践価値が聴衆に好評価を与えていると感じた。朝一番の発表であったが、セッション会場には 70 名程度の来場者がおり、参集状況もまずまずであった。会場からの質問は、教学 IR と本取組との関係性を問うものが多かったため、セッション終了後に、質問者を個別にフォローする形で質問に対応した。

《全国私立大学FD連携フォーラム 2012年度総会・パネルディスカッション》

□テーマ・趣旨

「大学の教学や運営への学生の主体的な参画～中規模以上私立大学における取り組みの現状と課題～」をテーマとしたパネルディスカッションにおいて「学生による学生・教員支援を通じた教育改善―『F 工房』の取り組みを中心に―」と題した発表を行った。

□概要

日　時　　6 月 16 日（土）13:30-17:10
場　所　　中央大学　後楽園キャンパス（東京都文京区）

□内容

本発表では、F 工房の取り組みおよび F 工房を中心とした学生のファシリテータ活動についての発表を行った。特に、キャリア系科目（「自己発見と大学生活」、「キャリア・Re-デザイン I 」）を中心に活動を展開している学生のファシリテータについて、授業の特徴とそれぞれ「キャリファシ」と「学ファシ」の活動内容や特徴、違いなどを明確にしながら発表を行った。

□成果・課題

本フォーラムで発表されていた他大学での「学生による学生支援活動」は、参画している学生の数も、実施している授業数も本学より多いこと、また、授業内にかかわる活動に関しては、有償としている（時給制など）大学が多いことが分かった。

他方で「ファシリテーション」をキーワードとしている本学の取り組みは、全国的にもかなりユニークで、本学の特徴であることを改めて感じる機会となった。

《第6回法政研究会》

□テーマ・趣旨

本学法学部教員が行っている「法政研究会」の第 6 回「FD：法学部 1 年次生に対する教育のあり方を中心に」において、F 工房の取り組みを発表した。

□概要

日　時　　9 月 13 日（木）10:30-12:00

場　所　　本学 4 号館 2 階会議室

□内容

本学法学部教員 10 名ほどが参加した本研究会において、F 工房の取り組みやファシリテーションの役割、そして学内で活躍する学生のファシリテータについて紹介した。

□成果・課題

ファシリテーションが初年次教育の現場でどのように活かせるのかや、TA／SA と学生ファシリテータの違いなどが共有された。また、そのような学生スタッフへのインセンティブ（金銭／単位／それ以外）のあり方についても活発な議論が行われた。今後、法学部と F 工房との益々の協働が期待される会となった。

《2012年度 第18回FDフォーラム 第10分科会》

□テーマ・趣旨

大学コンソーシアム京都主催の「2012 年度第 18 回 FD フォーラム」2 日目、第 10 分科会「学習支援における教職協働と第三の職種」に報告者として参加。報告者の 1 人目として「学習支援の現場における教職協働と第三の役割～キャリア教育科目の現場を例に～」と題した発表を行った。

□概要

日　時　　2 月 24 日（日）10:00-15:30

場　所　　立命館大学　衣笠キャンパス（京都市北区）

□内容

本学の 2 つのキャリア形成支援教育科目において、F 工房スタッフが果たしている役割を①授業におけるファシリテータ、②学生ファシリテータスタッフのスーパーバイザー、③授業運営のコーディネータ、の３つに分類しながら紹介した。

□成果・課題

本学のキャリア教育や F 工房の取り組みを学外の教職員等に向けて発信することができた。また、本発表では、教職協働や第三の職種についての問題提起を行いつつ、報告者の本音ベースでの発表スタイルであったため、後のグループワークの活性化に寄与できたと考える。

第2部　活動から得られた知見

1. キャリア教育を通じたファシリテータマインドの伝播

《キーワード》ファシリテーション、キャリア教育、学生による学生支援活動

はじめに

今年度のF工房の最大の成果は、初年次向けキャリア形成支援教育科目との協働・連携がより進んだことである。その科目とは「自己発見と大学生活」であり、今年度の春学期を中心にF工房は同科目の支援に多くの時間とエネルギーを割いてきた。ここでは、F工房が目指す「ファシリテータマインドの普及」が、本科目を通してどのように果たされたのかを検討してみる。

「自己発見と大学生活」科目におけるF工房の役割

本学のキャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」は、1年次生を対象として春学期に開講されている共通教育科目である（選択科目）。2011 年度より規模を拡大しながら開講しており、本年度は、全新入生のおよそ半分にあたる約 1500 人が受講し、15 クラス（1クラス＝70 人～120 人）体制にて運営された。（詳細は p.33 参照）

本科目に、今年度F工房は3つの役割でかかわった。それは、①ファシリテーションの専門家として、科目の教案作りの段階から担当教員と協働し、固定机の講義教室でスムーズにアクティビティを実施するためのアイディア提供を行う役割、②今年度新たに組織した「キャリア科目担当学生ファシリテータ（キャリファシ）」のスーパーバイザーとして、キャリファシのリクルートや研修を行いつつ、彼らの成長を支援する役割、③授業現場における実質的なコーディネータとして、全15クラスすべての現場に赴き、授業現場での様々な支援を行いながら全クラスの様子を俯瞰する役割、の3つであった。

キャリア教育とファシリテーションの親和性の高さ

「キャリア教育」と「ファシリテーション」は親和性が高いことが、本年度の活動の中でより明確となった。これは、本年度に行った学会等での発表でも明らかにした。

ここで言う「キャリア教育」とは、就職活動等のためのノウハウの伝授というよりはむしろ、広く自分と仕事世界との関係について考えながら、自立したキャリア形成に向けた行動ができるよう支援する教育のことを言う。そのようなプログラムにおいて、参加者は自身のキャリアについて考えたり、実際に行動したり、グループ活動の中で一つの成果を示したり、と言ったコンテンツを自ら産出することになる。そしてこのようなキャリア教育プログラムを運営する者は、参加者自身がコンテンツを産出するまでのプロセスを支援する役割を担う。

一方で、「ファシリテーション」とは、「グループ活動など相互作用が働く場面において、メンバーが産出するコンテンツには直接手を加えず、その場を下支えするプロセスに着目しつつ、それを中立的な立場から支援するスキルおよびマインドの総称」と定義できる。

すなわち、「キャリア教育」を実践するにあたっては、運営者はおのずと「ファシリテータ」となってプログラムを運営している側面があると言え、同時に「ファシリテータ」は「キャリア教育」のようなプログラムを違和感なく運営できる部分を持ち合わせている、と言うことができる。

以上のような点から、「キャリア教育」と「ファシリテーション」は親和性が高いと言うことができよう。

教員へのファシリテータマインドの伝播

「自己発見と大学生活」科目の特徴として、キャリア教育が専門ではない教員が多く本科目を担当している点が挙げられる。今年度は担当教員の9割近くがキャリア教育プロパーではなかった。これは、本科目の授業形態が〈教員によるコンテンツ伝達型〉ではなく、〈受講生によるコンテンツ産出型〉であるため、教員の専門領域に関係なく授業が運営できるからである。本科目で教員に求められるのは、キャリア形成や就職活動現場の知識を伝達することではなく、受講生がコンテンツ産出に集中できるような環境を整えるファシリテータとしての役割であると言える。したがって、本科目のようなキャリア教育の授業では、教員は多かれ少なかれファシリテータとして（本人にその自覚があるかどうかは別として）授業を運営していたとも言える。

このように考えると、本科目での運営を通じて、教員にファシリテータマインドが伝播していたと言える。

学生へのファシリテータマインドの伝播

本年度、「自己発見と大学生活」科目との連携が進んだことにより、同科目の受講生である学生に対しても、ファシリテータマインドが伝播したと考えられる。それは、本科目の受講を通じて、ファシリテーションを取り入れた授業、すなわち参加型授業を受講生が体験することになり、彼らがファシリテータマインドを学びつつ実践する機会を多く得ることができたと考えられるからである。

本科目は既述の通り、授業内容をデザインする段階からF工房が関与しており、授業プログラムのあちこちにF工房が培ってきたファシリテーションのノウハウが盛り込まれている。本科目は、受講生に直接ファシリテーションスキルを教授する科目ではないが、受講生が授業プログラムを体験しながら、ファシリテータマインドに触れ、そこから少しずつ身に付けていったと考えられる。このファシリテータマインドは、支援型教育環境の中で涵養されると言える。すなわち、受講生に指導・教授するのではなく、参加型授業を通じて、受講生の主体性を尊重しながら、彼らの知の創造を見守ったり、学びの動機づけを促したりする環境の中でこそ育まれる、と言うことである。そのような環境の中で、受講生がフラットな関係性を基礎としたグループ活動の楽しさやグループダイナミクスを体験したり、グループでの作業がうまく進むためには何が大切なのかについて考えたり、人とのかかわりの中で見えてくる様々な現象について、それを振り返ったり共有したりしながら、ファシリテータマインドを身に付けていっていると推測できる。

本科目は、次年度1800名規模での開講を予定しており、このままの受講生数が維持できれば、2015年度には本学の半数以上の学生（6000～7000名）が本科目を受講することになる。そして、その数だけファシリテーションを取り入れた授業を体験することになり、結果としてファシリテータマインドの学内普及に大きく寄与できることになる。それほどに、本科目の影響力は大きなものであり、F工房は本科目を通じて、そのミッションを強く推し進めることができている。

「キャリファシ活動」の成果

今年度、「自己発見と大学生活」科目において、「キャリア科目担当学生ファシリテータ（キャリファシ）」が発足した。キャリファシとは、同科目において受講生のサポートを行う先輩学生のことを言う。今年度、キャリファシの存在は同科目において大きなインパクトを残し、授業運営になくてはならない存在となった。ここでは、「キャリファシを通じたファシリテータマインドの伝播」と「キャリファシ内へのファシリテータマインドの定着」の 2 点をその成果として紹介する。

まず、「キャリファシを通じたファシリテータマインドの伝播」について述べる。キャリファシは、受講生同士が相互作用的関係の中で自らの大学生活について考えることを支援していた。彼らの果たすファシリテータとしての役割が、受講生および教員に対するファシリテータマインドの拡がりを補強していたと言える。彼らの果たした具体的な役割は、グループ分けを行ったり、メンバーの着席位置を指示したり、アイスブレイクの運営を担当したり、話し合いが上手く進んでいないところに働きかけたりすること等であった。また、資料の配布や回収、教室機材や照明、エアコンの操作など、教員の補助的な役割もキャリファシが担っていた。これらの役割をキャリファシが担ったことで、100 名程度の参加型授業であっても、円滑な授業運営が可能となり、受講生や教員が安心して授業に臨めることにつながった。

また、キャリファシが授業の中で活躍することによって、受講生がファシリテータとはどのように接してくれる人なのか、どのような役割を果たす人なのか、を理解することになり、結果として受講生にもファシリテータマインドが普及していったと考えられる。現に、受講生はキャリファシのことを、「自分たちが行っているグループワークをサポートしてくれる人」、「頼れる人」、「事がスムーズにいくよう支援する人」、だと感じていた（受講生に対して実施した「キャリファシアンケート」結果による）。

このことから、キャリファシの存在を通じて、受講生および教員にファシリテータマインドが伝播していったと考えられる。また、「ファシリテータ」という名称そのものが受講生へ浸透したこともキャリファシの大きな成果であったと言えよう。

2 点目の「キャリファシ内へのファシリテータマインドの定着」について述べる。キャリファシは、その活動の中でアクティビティを運営したり、受講生とかかわったりすることを通して、多くの体験を積み重ねてきた。ただ、そこでの体験をそのままにするのではなく、それを振り返ったり、キャリファシ同士で共有したりすることを通じて、各自の学びとして落とし込むところまでを活動の範囲としたし、その過程全体を F 工房は支援してきた。

例えば、「キャリファシの集い」では、参加したキャリファシそれぞれの体験を共有する中で、キャリファシ個々人が抱く授業内での葛藤が共有された。また、「自己発見と大学生活：全体発表会」の場においては、キャリファシが裏方となって会の成功に大きな力を発揮した。また、彼らの出し物として、20 分におよぶ演劇が上演され、キャリファシのチームワークを受講生に示すと同時に、彼ら自身の達成感や有能感が醸成される機会にもなった。さらに、4 ヶ月に及ぶキャリファシ活動の締めくくりとして 8 月に実施した「キャリファシふりかえり合宿」では、活動でのそれぞれの体験を共有しつつ、各自の学びに落とし込むことをもっ

て、活動の一旦の区切りとした。

これらの活動を経る中で印象的だったのは、様々な個性を持つメンバー同士が、先輩・後輩の垣根をこえ、互いに言いたいことを言い合える関係を構築していったことだった。これはまさに、キャリファシメンバーの中にファシリテーションが根付いたことを示すものであり、キャリファシがファシリテータとして確かに成長していたことの証左でもあるだろう。

「キャリファシ活動」の課題

最後に「キャリファシ活動」の課題について述べる。

本来、キャリファシには、〈教える側〉と〈教えられる側〉の間に立って、両者の円滑なコミュニケーションを促進してもらう役割を期待していた。言い換えるならば、教員と受講生との翻訳者的な役割、もしくは両者の間に存在するであろう「段差」を低くする役割、を想定していた。

しかし、実際には、キャリファシが〈教える側〉のアイデンティティを強く持ちすぎていて、授業の中で「ファシリテータマインドの風」を吹かすのではなく、単なる「先輩風」を吹かしているような場面があったり、逆に、〈教えられる側〉という意識しか持ち合わせていない受講生が、キャリファシに対して身構えてしまい、キャリファシが受講生とのかかわりづらさを覚えたりした。このことに関して、キャリファシ自身は常に葛藤していたようで、〈教える側〉と〈教えられる側〉との狭間で揺れ動くキャリファシの姿を、授業内・授業外で多くみることができた。

これらの課題に対する答えは、そう簡単に見つからないだろう。しかし、少なくともキャリファシ活動が始まる前に、キャリファシが果たすべき役割や受講生とのかかわり方について意識・留意したいことを、共有する機会は持つ必要があると考える。今年度は、事前研修の時間が少ないまま授業に突入したため、キャリファシに求めているものがしっかり伝わっていない状態だった。これらの反省を踏まえ、次年度のキャリファシ活動に向けては、事前に３回の研修を行ない、キャリファシとしてのレディネスを形成する予定である。

また、キャリファシ活動を今後、学内にどのように位置づけていくのかも、課題として挙げておきたい。現在は無償の活動となっており、活動に際して特に選考は行なっていない。しかし、今後受講生規模の更なる拡大とそれに伴うクラス数の増大によって、必要となるキャリファシの数はさらに増えることが予想される。また、「自己発見と大学生活」科目を受講する学生が増えれば増える程、キャリファシ活動に興味を持つ学生も増えるため、今後はリクルートの方法や選考の有無、インセンティブの是非など、様々な議論が必要になるだろう。

F 工房担当コーディネータ　中西勝彦

2. さまざまなステイクホルダーとの協働

《キーワード》ファシリテーション、協働促進、横断的支援

はじめに

F 工房が開設されて早や 4 年の年月が流れた。今年度は「学生支援 GP」ではなく、大学独自の事業として活動を展開し、学生支援に限らない「ファシリテーションの普及・推進拠点」としてより多くのステイクホルダーとの協働を行ってきた。本稿では、これらさまざまなステイクホルダーとの協働を通じて得られた気づきと、本学におけるファシリテーションの意義と課題について検証してゆきたい。

協働者の概要

今年度かかわったステイクホルダーを概観すると以下のとおりとなる。

・授業関係

キャリア形成支援教育科目、学部専門教育科目（法学部）、融合教育（司法外国語、人事・労務）、その他アイスブレイクやゲストとしてのワークショップ等多数

・課外活動

ボランティア活動室、教育支援研究開発センター、教学センター（ピア・サポーター）、部活動（アメリカンフットボール部）

・その他学生活動

サークル、インカレ活動（FD、社会活動）、社会的起業

・高等学校

京都産業大学附高等学校、地域の公立高等学校

・地域連携

京都府警察本部、福井県（ふるさとワークステイ・ボランティア活動室協力事業）

授業の支援

プログラムデザインの段階から関与する科目から、初回授業でのアイスブレイクまで、今年度もさまざまな授業の支援を実施したが、それらの中からファシリテーションに馴染む科目がより明確になった。具体的には、フィールドワーク等を伴う実学的分野や、政策に関与するもの、また教員やゲスト講師とのディスカッションを伴う科目、演習科目が該当する。

座学形式とはちがい、これらの科目は学生が自主的に行動することで学びは深化するが、学生はそれらに対するレディネスを持ち合わせていないことが多く、ファシリテータという第三者の関与により、潜在的な力を発揮できる構造が効果的であることがわかった。

特に印象に残っているのは、「中間まとめ」の回でかかわった融合教育科目「人事・労務の実務」である。この科目は法学部と経営学部の合同運営科目だが、法学部学生の割合が高く、課題においても「法学的」な意識に基づいた問題点が主に発表された。しかしそれらは「経営学的」には必ずしも適切ではなく、両者のバランスを考えて解決されなければならないという議論が教員から提示された。このことは学生自身に非常に大きなインパクトがあったよ

うで、授業後のフィードバック（レポート）でも多くの学生が言及していた。この気づきこそが、本科目がめざすゴールのひとつであり、授業へのファシリテーション導入のひとつの理想形であるとの思いを得た。

しかし、このような結果にたどりつくには、まず担当教員がファシリテーションの手法を導入することを意識しなければならない。残念ながらまだ導入事例は限定的で、一般化するまでの実績の積み上げには至っていない。

カリキュラム策定の時点で、担当教員がファシリテーションを認識し、何らかのコンタクトがあれば、授業という具体的な場に落とし込めるが、そうでない場合、どこにチャンネルをもつかが課題である。FD をキーワードとして教員にアプローチすることも一案であるが、現状では FD に関心がある層とファシリテーションに関心がある層はほぼ同じではないかと考えられる（しかも、まだ学内では少数派である）。しかし、以前実施した新任教員のワークショップ（平成 23 年度、教育支援研究開発センター）でも、「学生の主体性を引き出すにはどうすればよいか」という悩みが多くの教員から出されたことからも、すでにニーズはなかば顕在化している。いかにコンタクトをとれる機会を確保するかが大きな課題である。その際注意すべきは、あくまで学生のコンピテンシーに働きかけるものであるという、ファシリテーションの趣旨を明確に伝えることである。興味が増したからといって成績に直結するものではないこと、場の活性化は学びへのスタートラインに過ぎないことを理解し、「その先」をどうするかを意識できるよう働きかける必要がある。

課外活動

課外活動では、ボランティア活動室や部活動等の長期にわたる取組み、ピア・サポーター活動のように現場には赴かず後方支援のみ行ったもの等、さまざまな形態の支援を行った。ここでは、ボランティア活動室との協働プログラム「夏休みふるさとボランティア 2012 in 福井（以下、夏ボラ）」の事例を中心に扱う。

夏ボラ事業は、大学（ボランティア活動室、F 工房）、地域（福井県農林水産振興課および地域の受入れ担当者）、事業コーディネータ（ふくいエコ・グリーンツーリズム・ネットワーク）と、地域も立場も異なるさまざまなステイクホルダーが関与した事業である。これまでは、福井県の事業（ふるさとワークステイ）を京都産業大学の学生が集団で体験するという形で、事業の大学としてのアイデンティティ（活動から得られる学習効果を期待する）は確立していなかったが、昨年度より F 工房が協働するなかで、「大学が企画する活動」としての特色を出せるようになった。

また、この事業では学生ファシリテータがワークショップの運営支援という明確な役割をもって参画した。授業支援等、学内での活動に学生ファシリテータが関与することは少なくないが、学外での地域おこし活動という特殊な場において、少し離れた立場からグループ活動を支援することには大きな意義があった。身体的にも精神的にも大きなストレスをもつ学生ボランティアや地域の受入れ担当者と、いい意味での「温度差」があったことで、伸び伸びと意見を表明できる環境づくりができたことで、夏ボラが単なる「地域おこしのお手伝い」に終わらず、社会参画からの学びの場へと昇華させることができた。また学生ファシリテータ自身も、文字どおり多様な人たちがかかわる場でのファシリテーションを体験したことで、大きな成長につながった。この事例が「大学の地域連携」のよいモジュールとなればと思う。

その他学生活動

サークル（特に非公認）や他大学の学生と合同の活動は、システム上本学では支援しづらいニッチな領域であり、実際学生部などの「公的な」支援窓口で扱えない活動の相談をいくつか受けた。

当初は、本来対応すべき部署が対応することがベストとも考えていたが、考えようによっては少し（物理的にも、心理的にも）距離のあるF工房が対応することにはむしろメリットとなる点も多々あることに気づいた。一例として、ファシリテーションを「ソトのもの」と考えることで、既存の関係性にとらわれず意見交換ができることである。

また、ここで特記しておきたいのは、F 工房の「場」としての意義である。活動記録としては残しづらいが、特に目的をもたず（正確には「そこにいる」ことが目的である）訪れる学生が、職員や他の学生との交流を通じてファシリテーションに対する理解を深めたり、F工房が直接関与しない活動の当事者となったときに「ファシリテーションのことならF工房に」と訪ねてくる様子を見ると、「場所」として存在することは定量できない意義があると実感した。

費用対効果としては必ずしも高くはないが、教育的投資として考えることが妥当ではないかと思われる。ただ、学生間の認知はまだ高いとはいえず、広報のあり方を再考する必要がある。具体的には「利用者の声」として利用の実例を学内外で共有すること等が考えられる。

高等学校

附属高校において毎年1月末から2月にかけて実施される「高大連携グループワーク」も5 回目を数える。既存のモデルもない中を手探りで運営してきたが、一定の様式ができ、卒業生がファシリテータとして参画するまでに成熟した。

従前の高校教育における教員の行動様式は、教員による「指導」が中心であったが、ここ1～2年は、教員の間に意識変革が進んだように感じる。初年度は、少なからぬ緊張と葛藤が教員全体から感じられたが、授業内容に応じて自在に行動を変化させている教員も現れ、一参加者としてともに学びながら、一期一会のファシリテータでは知ることのできない生徒の背景に基づいた助言を得ることもできるまでになった。

将来の京産大生を育成するという目的において、高大連携事業は重要な意味がある。ただ1 か月だけの協働に終わらず、もっと関係性の強化がはかれれば、さらに連携を推進することができるのではないか。

また、今年度はコミュニケーション学習として地域の公立高校でのワークショップを運営したが、高校生のメンタリティ理解など、附属高校での経験を活かすことができた。同時に、附属高校とのさまざまな相違点を見ることができ、より広い視野を得ることができた。

地域連携

学生支援 GP としての事業では活動の射程には入っていなかったが、ファシリテーションは「異なった立場の人を平等につなぐ」という機能を本来的に持ち合わせている。そういう意味では、効果が非常に目に見えやすい分野であるといえる。

今年度は警察官を育成する部署である「育成推進室」のスタッフのファシリテータ研修を

実施した。職位や階級による序列が明確である警察組織とファシリテーションは、一見遠いもののように見えるが、実は、警察官は、安全・安心な市民生活を支えるファシリテータと考えることもでき、その育成段階でファシリテータマインドにふれることは意義深いと感じる（ただ、あらためて研修の場で意識しなければならないことに、地域社会でのコミュニケーション不全の問題であるが）。

このような協働の形は、警察を開かれた組織にするとともに、大学としても地域貢献に寄与するという、Win-Win の関係性であり、それはすべからくファシリテーションがめざすゴールである。学内外での調整が必要になるが、もっと推進されてもよい分野であると思う。ただ、本学での地域連携推進担当とは関係性が構築できておらず、今回の結果等をもってアプローチをする必要がある。

横断的支援の意義と障壁

ファシリテーションとは、利害や立場のちがいにかかわらず、さまざまな当事者の合意にもとづく民主的決定過程を支援することが大きな目的のひとつである。その意味で、ここに述べた協働事業は、ファシリテーションの本領が発揮される場であったといえる。年々実践例も積み上げてきているが、それでも限定的なものであることは否めない。

ファシリテーションをひとつのオプションとして捉え、必要に応じて活用できることがひとつの目標であるが、まだまだ現状は混沌としたものである。F 工房の活動に関与した人であれば、その是非も含め、ファシリテーションの意味について考える機会とすることができるが、無関心層に対しては効果的な周知ができていない。しかし闇雲に認知度を高めても、今度はマンパワーの問題などでキャパシティを超えてしまい、じっくりと対応できなくなるというジレンマに陥ってしまう。

また、大学に部署横断的な活動の事例がまだ少ないことも、ファシリテーションの普及の妨げになっていることが考えられる。たとえば、融合教育のような学際的分野への関与はひとつの突破口になるのではないかと考えられる。

おわりに－「Ｆ工房のスタッフ」であること

協働を促進する場において、ファシリテータが中立であることは大前提である。F 工房の存在は、それを担保するものではないかと考えるようになった。当事者どうしの利害・対立関係の有無にかかわらず、協働促進のわかりやすいシステムであることは、F 工房としてのひとつのアイデンティティであるということが、これらの協働事例から得られたひとつの結論である。

F 工房担当コーディネータ　北村広美

活動を振り返って

一年間の活動を振り返ってみると、いくつかの成果と課題が浮かび上がってくる。成果としてはまず、キャリア教育の中にファシリテーションが定着し、その波及効果として、学部によって濃淡はあるものの、学部専門教育とりわけゼミ系授業において協働が実を結びつつあるのは特筆に価する。一例をあげると、平成25年度開講予定の文化学部初年次ゼミの運営においては、キャリア教育科目と学部初年次ゼミの両方に関わる法学部教員のノウハウが活かされているが、ファシリテーションの普及がＦＤ活動の活性化につながる事例はおそらく本学独自のものであり、今後飛躍的に拡大・深化することが期待される。

事例は多いとは言い難いが、融合教育科目における協働も特筆に値する。協働の結果、この領域におけるファシリテーション導入の意味が明確となり、今後の展開が期待される。

ボランティア活動室との協働による夏休みボランティア支援、教育支援研究開発センター等との協働による学生ＦＤ活動支援、教学センターとの協働によるピア・サポーター支援、学長室との協働による附属高校キャリア教育支援、学生部との協働による部活動支援など、正課外の学生支援の領域において様々な支援事業を行ったが、とりわけボランティア活動室、教育支援研究開発センターおよび教学センターとの協働は今年度大きな進展を見せた。

研究的な側面では、ラボラトリー方式体験学習への理解が深まったことで、Ｆ工房のスタッフ力が向上し、Ｆ工房が参画する多くの事例において、津村先生の言う体験学習の循環過程（体験・指摘・分析・仮説化の4段階が循環することで学習が深まっていく過程）を意識的に遂行できるようになったことは重要な意味を持つ。また、主に教育支援研究開発センターとの協働により、キャリア系や教育系の学会・研究会でＦ工房の取組みを発信することも格段に増えたが、このこともＦ工房のスタッフ力を向上させるうえで大きく貢献した。

最後に、Ｆ工房の抱える課題について触れておきたい。個々の事業における課題は各項目にゆずるとして、組織全体の課題として、活動の軸足をこれまで通りキャリア教育に置くのか、それとも専門教育におけるファシリテーション普及を第一優先とするのか、その岐路に立たされていることがあげられる。Ｆ工房が誕生した経緯からいっても、授業のコンテンツを産出するのは受講生自身であるという授業形態からいっても、キャリア教育にとってファシリテーションは不可欠のものであり、そこに軸足を置くことは必然性を持つ。翻って、本学の直面する教学上の課題の一つが、専門教育と協働したコーオプ教育の全学展開であるとするならば、今年度の成果にあげたように、ファシリテーションがこれら二つの教育の融合に不可欠のマインドと技法を提供するものであることも論を待たない。

このようなジレンマは、Ｆ工房のスタッフが大幅に増員されればたちどころに解消するものであろうが、現有勢力を前提とするならば、優先順位をつけることが避けられないであろう。来年度の事業を展開する中で、この問題に対する答えを見出していきたい。

Ｆ工房事業統括/文化学部教授　鬼塚哲郎

参考資料

ファシリテーションの実践事例

【付箋紙を使った意見出し】
同時にたくさんの意見表明ができ、かつ発言者の力関係にとらわれない自由な発言を引き出すことができる。

*夏休みふるさとボランティア 2012in 福井（最終日ワークショップ）

【コンセンサス実習】
ラボラトリー方式の体験学習のひとつ。グループメンバーの総意で答を導き出し、合意形成のプロセスをふりかえる。

*第 15 回ファシリテータ研修会

【フリップを使ったパネルディスカッション】
発言の趣旨をキーワード化して提示することで、情報の可視化と聴衆への印象づけをはかる。
書かれたフリップは時系列で掲示し、議論の流れを残しておく。

*ファシリテーション研究会（春学期）

ファシリテーションとは（京都府警研修資料より抜粋）

京都府警察本部　警務部教養課　育成推進室研修

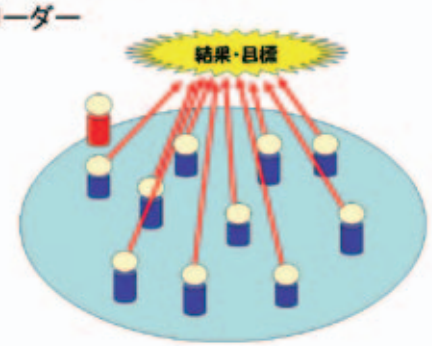
職場に活かすファシリテーション
（その2）

平成25年1月9日
京都産業大学　キャリア教育研究開発センター
F工房

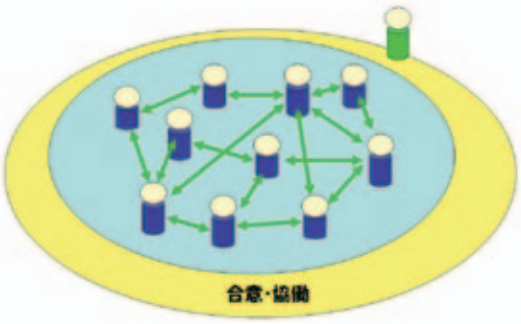
ファシリテーションとは（前回のおさらい）

- facilitation
  - facil + ~ation
- 目的達成を支援する「名脇役」
  - 「交通整理」に似ていると思います
- 支援という立場
  - 命令や指導などで「相手を変える」のではなく、「よりよい方向に向かえる環境を整えること」
  - 自分にも心がまえ（ファシリテータマインド）が必要
- 応用できる場面は多彩
  - グループでも、個人でも

リーダー



ファシリテータ

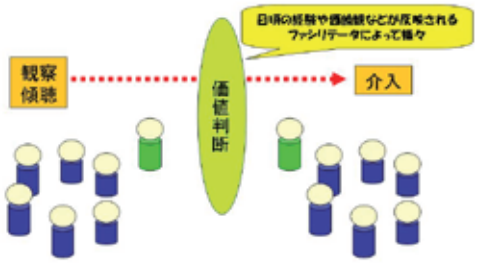


プロセスを見る・耳を傾ける

データを収集する際の3つの視点

- コミュニケーションのデータ
  - 誰と誰が話したか？
  - 話した回数・時間は？
  - 誰が誰を支持したか？
  - どのように感情表出がなされているか？
- 意思決定のデータ
  - 決めるのに要した時間は？
  - 誰が決めたか？
  - どのように決めたか？
  - 1人の決定、多数決、合意など
- 雰囲気のデータ
  - 不安、緊張感、凝集性、自由さなど

ファシリテータのアプローチ



プログラム立案に必要なこと

- 目的
  - 何のためにするのか
  - 実施によりどういう変化を期待するのか
- 場の設定
  - 目的達成にふさわしい場
  - 対象や内容によって適切なものを選ぶ
- 「身につく」ためのしかけ
  - 自主的参加を促す内容
  - 対象との親和性
  - 気づきを促すふりかえりやフォローの機会
  - インプットとアウトプットのバランス
  - 社会化、一般化

「ふりかえり」を行う意義（ファシリテーション学びの場より）

ファシリテーションの場に不可欠な「ふりかえり」についての思いを、参加者のことばで語りまとめたもの。

グループワークのすすめ方ガイド（高大連携グループワーク）

親しみやすい雰囲気になるよう、手描きで作成。

2012年度

京都産業大学 × 附属高校　グループワーク

京産大附属高校が もし100人の村だったら

調査がイド！

☺基本的なコト

調査したことを、百分率で表す。　…「100人のうち △△人です」

モラルやプライバシーに配慮する　→　同じコトを自分がきかれても抵抗ないか?!

1. 計画をたてる

- まず、何を知りたいのかを明確に。
- 全体のテーマをきめる（すじが通っている方が後で発表しやすい）
- 調査項目をきめる

2. 調査票をつくる

☆ここまでできれば 8割達成!!

- 全員がわかるコトバを用いる　ex. 定義をはっきりする（いろいろに解釈できると不正確?）
- 対象を明確にする
- 選択肢式にする場合は、もれが生じないようにする
- 特定の方向に誘導しないように
- 否定疑問文にしない

NGワード

- あっちゃ、バリ、オニ oo
  ※人によって程度がちがう
- 個人名がニックネーム
  ※だれかわからない人がいる
- ～ではないですか?
  ※YesなのかNoなのか

3. サンプリング（抽出）をする

できるだけ広範囲からデータをとるコト!!

全数は無理なので、母集団から抽出する。

4. 集計する

- 質問紙をつくる場合は、通しナンバーをふる
- まちがいやもれがないか、複数でチェックする

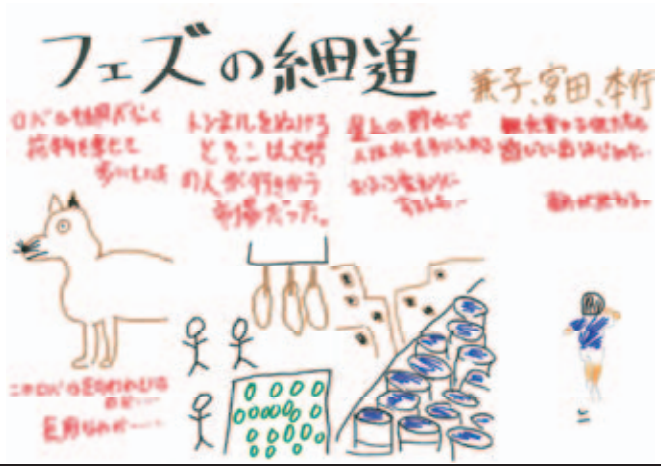
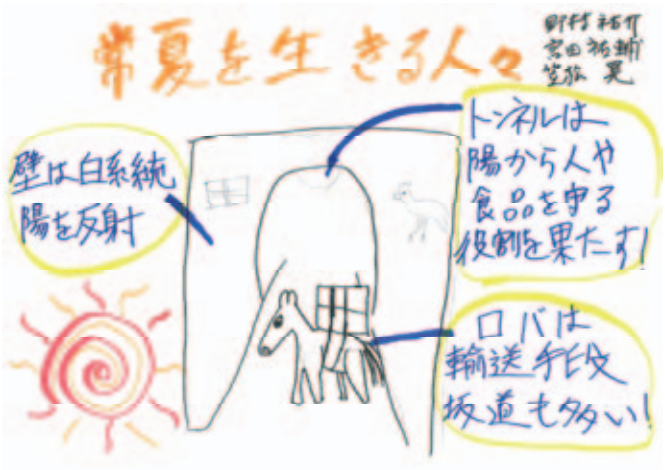
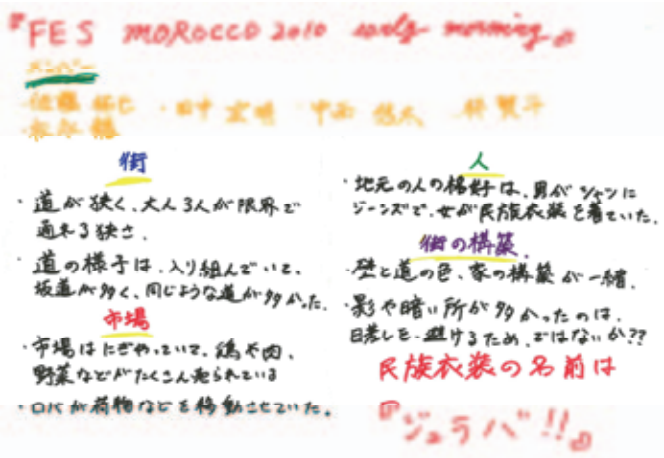
→ 4.と5.は手分けして効率よくやろう!

5. 資料をつくり、発表する

- 今回はA3サイズの用紙を使用
- グラフにしたり、イラストなどを使って「魅せる」資料をつくろう!
- 資料を見ただけでもわかるように、必要に応じて説明をつける

グループワークによる多様な表現（フィールド・リサーチ授業より）

6 分間の映像を、紙 1 枚で表現するグループワーク。グループの個性が着想点と表現手法の両方で発揮され、それぞれ異なった印象の作品ができた。チーム・ビルディングと「見て、伝える」という授業の趣旨がマッチした事例。 *3）授業の支援　学部専門教育「フィールド・リサーチ」参照。

	「猫目線」の風景をテーマに作成（製作者談）。 散文詩のような表現が印象的で、1 枚の中にストーリーを感じさせる。 文字やイラストのタッチから、複数の書き手による連作であることが見て取れる。
	映像から受ける印象をダイレクトに表現。 しかし、フェズは「常夏」ではなく、指導教官からもその点を指摘されていた。 情報は伝達の段階でさまざまな「ノイズ」が入るため、正確に伝えるためには事実の裏付けが必要であることを示した例。
	文字だけによる表現。 イラストが入らない分インパクトは少ないが、色や配置などで情報を整理しており、「読む」というよりは「見る」ことを意識した構成である。 また、衣装の名前を別途調査するなど、見た情報を強化している。

学会等発表資料（大学教育学会 第34回大会より）

京都産業大学

低意欲・中間意欲層の学生への
組織的支援とファシリテーション

○中西勝彦・○中沢正江・蒲原哲郎・森洋・山内尚子・見玉英明
京都産業大学
キャリア教育研究開発センター（F工房）・教育支援研究開発センター
2012/5/27 Sun.@大学教育学会第34回大会（北海道大学）

目次

- 背景・問題意識
- 学生支援手法としてのファシリテーション
  - 定義、機能
  - 本学におけるファシリテーションと組織的学生支援
- 本発表の目的
- 実践内容
- 実践から得られた知見
  - 初年の経験を通じた
    - 社会的経験の学びへの転換
    - フラットな信頼関係の構築
    - 「社会」「自己」に対するリアリティ獲得
  - の、支援に適したファシリテーション

背景：大学構成員共通の想い

- 学生一人一人が、その個性を活かしながら社会へと旅立ち、社会に貢献できるように
  ex. 学生の自立、自律的学習者、主体性・・・
- なんらかの要因で、大学生活に主体的に取組めていない学生がいる・・・
  ・・・職員も教員も一緒？

どうやって支えるのか？
（学生支援者としての悩み）

背景：低単位学生の分析からの示唆

- 低単位学生が（自身の思う）「理想の大学生」を体現できない理由
  大学への関わりを阻害する４要因 (山田 2011)
  - 他律感、不信感、疲労感、不安感

10名のヒアリング調査記録を詳細に分析

自分の生き方に選択の余地があると考えていない（他律感）、先人＝社会人が理解できない（不信感）、という問題は、社会に対する自己のリアリティを失わせ、疲労させ、不安にし、結果、大学生活へのモチベーションを保てないという状態を引き起こしている・・・？

学生支援方法としてのファシリテーション

ファシリテーション：促進すること
- グループによる問題解決やアイデア創造、合意形成、様々な知識創造活動を促進したり、時に舵取りをすること
  本学では：自己表現や自己理解などを促す動き方(?)をすることも

ファシリテーションの導入により、学生支援の取組の改善や教職員の能力開発をF工房を基軸にして展開(H20～)
全学的に普及・定着させ、学生の活動の活性化と自律の促進を行う

ファシリテーションを中心とした組織的学生支援

本発表の目的

- 正課授業のキャリア２科目の実践を例として

「ファシリテーション」が
どのように「学生の自律」と関係しうるのか

を探る

「自己発見と大学生活」①【概要】

目的
初年次教育の一環として、自己および他者（受講生どうし；教員；先輩；社会人）との対話を通して、自らの大学生活をデザインし、実践の行動へとつなげる

対象
全学部（８学部）の新入生全員
受講生
新入生の半分（約1500名）

受講生70～120名
教員１名　ファシリテーター２～４名
× 15

授業の流れ

「自己発見と大学生活」③【成果】

受講生の成果・効果（2011年度授業アンケート結果より(n=570)）

①受講する前と受講した後の変化について

A）討論・発表を経験して、自分に自信がもてるようになった

受講前：「ややそう思う」「普通」が最多 ⇒受講後：「普通」「かなりそう思う」が最多

B）レポートや討論を通じて、自分のことがわかるようになった

受講前：「ややそう思う」「普通」が最多 ⇒受講後：「普通」「かなりそう思う」が最多

C）将来の仕事や大学生活の過ごし方について、真剣に考えるようになった

受講前：「ややそう思う」「普通」が最多 ⇒受講後：「かなりそう思う」「そう思う」が最多

D）社会人、先輩、クラスの人の話を聞いて、何かに取り組もうという意欲が高まった

受講前：「ややそう思う」「普通」が最多 ⇒受講後：「かなりそう思う」「そう思う」が最多

E）コミュニケーションや議論、討論の能力が上がった

受講前：「ややそう思う」「普通」が最多 ⇒受講後：「普通」「かなりそう思う」が最多

②現時点で役に立ったと感じること

「大学の先輩から大学生活の体験談が聞けた」30%、「他の学生と大学生活の過ごし方について議論できた」21%、「社会人から仕事、キャリアデザインの話が聞けた」17%、「自分の大人にインタビューし、インタビューシートを作成したこと」12%……

③満足度

「非常に満足」14%、「かなり満足」41%、「どちらかというと満足」37%、「あまり満足していない」3%、未回答3%、「ほとんど満足していない」1%、「わからない」1%

KyotoSangyoUniv. CERADES. 9

「キャリア・Re-デザインI」① 授業概要

本科目の概要

- 2005年度秋学期に開講以来、春／秋学期とも開講
- 学部の上限単位数を超えて履修することが可能
- 1クラス15～20名 × 5or6クラスで運営
- 不定期水曜日3＆4限と合同授業にて構成

受講生像

対象学生は、何らかの理由で「授業から足が遠のき」、結果的に「低単位になってしまった」学生

授業の目的

授業の中で、ライフイベントとしての「大学生活」の相対化を試みる

①自らの生き方に選択の余地があることを知る

②授業に参加する全ての人が、大学という枠組みを超えた一人の市民として「自律的な自己」（役割を演じていない自己）でいることができる

③一人の市民として葛藤しながらも、信頼関係を構築し、社会や人間関係に対するリアリティを獲得する

KyotoSangyoUniv. CERADES. 10

「キャリア・Re-デザインI」② 授業イメージ

授業運営

①教員・職員・学生ファシリテータ・社会人専門職がファシリテータとして参加

②ファシリテーションは「観察」と「フィードバック」を軸とする

③クラスごと、科目ごとにＰＤＣＡサイクルを回す

対象

全学部（８学部）の学生全員

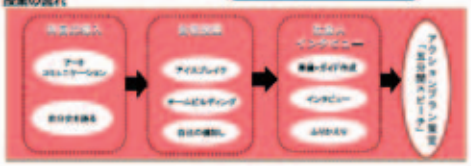
（１年次生春学期のみ受講不可）

受講15～20名

教員１名　ファシリテーター4名

× 5

授業の流れ



KyotoSangyoUniv. CERADES. 11

「キャリア・Re-デザインI」③ 授業風景

KyotoSangyoUniv. CERADES. 12

「キャリア・Re-デザインI」④成果

2011年度授業アンケートから見えてくる授業の成果

- 大学に入って、しっかり考えて人の言葉を聞く機会が少なかったので、同年代の人の言葉を聞いて、今の自分と比べてどうか考えさせられた。自分の考えも改めて口に出してみると心の中で考えて答えを出そうとするより、より答えが出やすいのではないかと思った。
- 人の価値観は違うとわかっていたけど、普段の友達関係では共通部分に引かれあって友達になっているので、さほど価値観の違いが表に出ないけど、この授業ではそれがはっきり出ておもしろかった。
- 自分の心のカベは壊した後に、意外ともろいものだったと気づいた。そこからより自由にふるまえるようになった。
- 初対面の人にこれだけ入れ込む事はなかったし、他人を知れたのと自分を少しでも知ってもらったことは貴重な体験だった。
- 大学生になって初めて自分を成長させることができたと思った。ここにいる人と出会えてよかった。

KyotoSangyoUniv. CERADES. 13

組織的学生支援のポイント

チームとして運営

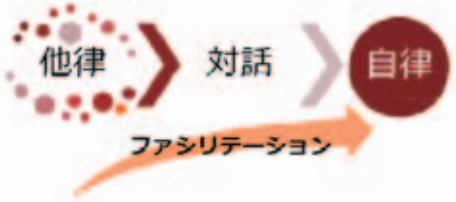
- 様々な立場の視点をもとにフレキシブルな運営
- ワークごとに最適な人が進行役を担う

ふりかえりの徹底

- 受講生・ファシリテータともに
- コンテンツの再確認
- プロセスから自己効力感の獲得

KyotoSangyoUniv. CERADES. 14

他律から自律へ



「他律」から「自律」へのシフトチェンジ

KyotoSangyoUniv. CERADES. 15

（関西地区FD連絡協議会 第5回総会より）

キャリア教育におけるファシリテーションの役割

中西勝彦・鬼塚哲郎・中沢正江・森洋・山内尚子・児玉英明
京都産業大学　キャリア教育研究開発センター・教育支援研究開発センター

1. 京都産業大学・教育の質向上の観点からみた本取組みの位置づけ

京都産業大学では、コーオプ教育の理念に基づき、全18のキャリア科目を開講している。それらは大まかに「キャリア形成支援型」「オン・オフ融合型」「地域コーオプ型」「PBL（課題解決）型」の４つの科目群として捉える事ができる（発表者整理による）。本研究では、「キャリア形成支援型科目群」にフォーカスし、初年次学生に対して開講される「自己発見と大学生活」、および低意欲・低単位学習者層に対して開講される「キャリア・Re-デザインI」の二つの取組みにおけるファシリテータの役割について考察する。

2. 初年次教育における教育/学習支援の実践

3. 低意欲・低単位学習者に対する教育/学習支援の実践

ファシリテータが
支援するプロセス

4．考察

①授業コンテンツは学生自身が個人ワーク、ペアワーク、グループワークなどを通じて産出する。教員・学生ファシリテータともにこれらのワークを支援するファシリテータのスタンスで関与する。ファシリテータとして関与するということは、互いにフラットな市民的関係性の構築を含意しており、このような関係性のなかで受講生はのびのびと自らのキャリアにかかわるコンテンツを産出する。
②これらの科目における教員の役割は、コンテンツを提供することではなく、授業運営のデザインを教員以外のファシリテータと協働しつつ行う点にある。受講生からコンテンツの産出を引き出すためには、受講生が「安心して話せる環境」を構築することが教員の最優先課題となる。その際、「安心して話せる環境」が現実に機能するためにはクライアントである受講生の視点を取り入れることが必要である。これら２つの科目においては、元受講生が学生ファシリテータとして参加する仕組みになっており、受講生目線を取り入れたプログラムデザインがなされている。
③初年次教育における学習支援の取組み（自己発見と大学生活）においては、クラスの規模と数を考慮し授業運営にブレがでないようガイドラインにそって運営される。ガイドラインは教員が作成し、授業運営にかかわる教員・ファシリテータ全員で共有されている。
④低意欲・低単位学習者に対する学習支援の取組み（キャリア・Re-デザインⅠ）においては、科目全体の到達目標および授業各回（通常２コマ連続）の到達目標は共有されているが、授業運営のデザインは、各クラスの教員・職員ファシリテータ・学生ファシリテータによって構成される運営チームの裁量によって行われる。各回授業のデザインは、授業運営チームの構成、受講生のニーズによって毎回更新される。
⑤今後は、このような取組みが受講生に何をもたらしているのかについて、卒業生調査などを通じた長期的スパンでのエビデンスを獲得する必要がある。

平成24年度 Ｆ工房活動報告書

平成 25 年 3 月 31 日発行

発行・編集　京都産業大学キャリア教育研究開発センターＦ工房
〒603-8555　京都市北区上賀茂本山
TEL：075-705-1963　　FAX：075-705-1976
E-mail：ksu-f-acilitator@star.kyoto-su.ac.jp

Facilitator Mind
京都産業大学
キャリア教育研究開発センター　Ｆ工房